Plot

1

City & Water　都市と水をめぐる

not seeing what is here nor what is behind

ここに在るものが見えなければ、背後にあるものを観ることはできない

— 『Oedipus The King』 Sophocles

Contents

脈動する水の都市

京都府立大学大学院生命環境科学研究科准教授 松田法子さん

Insight Research Report vol.1

梨木神社で起きている事象から考察する、課題と変革について

株式会社COFFEE BASE ディレクター牧野広志さんのお話

Insight Research Report vol.2

京都千年の地下水

関西大学環境都市工学部都市システム工学科地盤環境工学研究室 教授 工学博士 楠見晴重さん

Insight Research Report vol.3

社会的共通資本としての水（前編）

宇沢国際学館代表取締役占部まりさん、滋賀県庁 琵琶湖保全再生課副主幹 小林匡哉さん

Insight Research Report vol.4

社会的共通資本としての水（後編）

宇沢国際学館代表取締役占部まりさん、滋賀県庁 琵琶湖保全再生課副主幹 小林匡哉さん、
京都府立大学大学院生命環境科学研究科准教授 松田法子さん

Water Calling — 京都を流れる水の音が聞こえますか？

キュレーター/プロデューサー　永井佳子さん

Final Report；

Roundtable Discussion

To Designing

About The Future

And Creativity

of Kyoto City

Plot

1

文化的観点から、
解くべき問題の核心を洞察する

「都市と水」をテーマにフィールドワーク型のリサーチツアーを行い、文化的観点から京都という都市の価値や解くべき問題の核心を洞察することに挑んだ。参加者は、京都府立大学大学院生や他大学の学生の他、都市史、都市政策、経済を専門にする有識者、京都市、情報機関、企業、アーティスト、デザイナーなど専門領域も実に多様な方々が総勢30名程集まり、2日間に渡って都市の水をめぐるリサーチツアーを実施し、ツアーの最後にはパネルディスカッションを実施。

1日目のフィールドワークでは、「都市と水」の関係性から都市を捉え直すことを前提に、京都の内の水“地下水”がどのように形成され、使われてきたのかを把握した。今も地下水が使われる場所として訪れた梨木神社で起きている事象から課題と変革の重要な要素を把握することで、京都という都市の価値や解くべき問題の核心の洞察へと繋がり、結果的に最終分析フェーズにおける軸となった。
2日目のフィールドワークでは“京都と琵琶湖の繋がり”に着目し、琵琶湖の湖水から京都に水を流す水路として明治期に作られた「琵琶湖疏水」を実際に歩きながら体感した。100年以上経った今も現役の設備として使われている水路を歩き、水路を流れる水の音を聴きながら、身体的、感覚的に「水」を体感することは、先人たちが築き上げてきた“路”を知ることでもあり、社会の豊かさや人々の暮らしを豊かにすること、将来世代へとその価値を繋いでいく“志”に触れることでもあった。“not seeing what is here nor what is behind.”ソフォクレス「オイディプス王」の一節で表現されているように、“足もとに在る”過去から現在までの“路”を知ることは、予測しずらい“背後にある”未来を憂いるよりも、私たちに深い知恵と洞察を与えてくれる。

水から都市の成り立ちを洞察していくことで、都市と水、自然と人、人と人、人と社会の間にある「関係性」という一つのキーワードが浮かび上がってきた。これはRound Table Discussion_2「都市と、文化の循環」にて、さらに詳しく議論がなされている。

＊2日間に渡る「都市と水」フィールドワークの企画は、都市史を専門に研究する京都府立大学大学院生命環境科学研究科准教授 松田法子氏と株式会社ロフトワークの共同設計によるものである。

Essay

脈動する水の都市

京都府立大学大学院生命環境科学研究科准教授
松田法子

近代を迎えようとする京都は、幕末の戦乱や東京奠都のために衰微していた。都市の復興と新たな前進のために計画されたのが、琵琶湖から京都市中へ引水する琵琶湖疏水だった。
疏水の有用性は莫大で、上水のほか、当時京都盆地のかなりの面積を占めていた農地への灌漑水、そして鉄道の登場までますます需要が増していた水運での利用が見込まれた。第一疏水は1890年に完成、1891年にはアメリカの視察結果を反映して蹴上に水力発電所が稼働。これで日本初の電気鉄道が京都のまちに誕生する。京都市による明治の「三大事業」も、やはり水に関わるものだった。第二疏水の開削、上水道の整備、道路拡幅に市電の敷設。京都の都市人口の増加と各種工業を伴う近代化において、都市基盤と社会資本を整える大計画。明治期に行われたこのように工学的な水のデザインが、近代京都の基盤をつくった。その結果現代にも、京都市で使われている水道水の99％の原水は疏水を通じて琵琶湖から運ばれている。京都の人びとが飲む水も、やはり99％が琵琶湖のもの。

京都市の年間給水使用量は、1億8045万3927立方メートル（令和元年度）。琵琶湖には約275億立方メートルの水があるという。みずうみには大小あわせて400本以上の川が流れ込む。その水源は周辺の山地に降った水。ところで琵琶湖の水を涵養するその山々は、京都盆地を囲む山地にもつながっている。
京都のまちの底には、琵琶湖に匹敵するほどの水があると言われる。京都水盆とも呼ばれる巨大な水がめ。疏水開通以前の京都のまちでは当然ながら、盆地の中でほとんどの水を調達していた。庭園、染物、茶道、酒、食など、京都のあらゆる文化と基本的な衣食住は、京都盆地の水によって生命を与えられ、育まれ、維持されてきた。そういって言い過ぎることはないだろう。
ところで、ここでちょっと考えてみよう。その土地の水だけでは日常をまかなえない居住の構造とは、とても近代的な現象だ。他の土地の水系から産業のエネルギー源として水を引き込む。それは、近代というプロジェクトの思想そのものでもある。疏水事業と三大事業は成功した。それなしに現代京都は存在しないし、都市の近代的な発展もなかった。いっぽうで水とはきわめて土地に即した存在でもあって、そのミクロな個別性と質が、土地というものに重要な特徴を与えている。
現代都市京都の地中で静かに脈動する水にはまだ、井戸というすばらしいトンネルを通じてアクセスすることができる。下鴨神社の御手洗の井、梨木神社の染井、そして四条烏丸の繁華街の路傍にさえ、歴史的な井戸はある。新しく建てられた商業施設や料理店が井戸を掘ることもある。京都の地下水はそこ・ここで、実は地表に立ち昇り続けている。

東山の、見通しのよいところに立ってみるといい。そこから見渡す京都盆地は、まるで大きな湾のようだ。家々の屋根や高層ビルの窓が反射する日光は、さざ波が照らし返す光。水蒸気に包まれて広がる京都は巨大な湖底都市のようでもあって、ひとつひとつの建物は海の構成員のようでもある。

京都は、海だった。

実際のところ、かつて京都は海だった。まちを取り巻く山裾は、この盆地の奥までたびたび入り込んできた海を臨む、岬だった。50万年前までのこと。

持ち上げられた海底は北山の山並み（だから北山の山地は準平原といって、格別に高い峰というものがない）。

そして想像力は、京都のまちの北にあおあおと広がる山並みを、高く盛り上がった海面に変えてみせる。それは、ヴィジョン〔幻視〕ではなく歴史。

北山の集落の家の門口に立ってみるといい。そこにはときどき、朱や緑や青色の、山の美しい石がつましく置かれているだろう。それは放散虫というプランクトンの殻が、気の遠くなるほど長い時間をかけて海底に降り積もってできた石だ。海の生き物たちが山の戸口で、かれらの長大な過去を賑やかに囃し立てる。

地表の大地となった北山というかつての海底に、たくさんの雨が降り注いだ。地表を流れ下り、あるいはいったん染み込んで湧き出す水流は、大地を削り、山々のかたちを浮き彫りにした。山の洞（うろ）からしたたる水滴は互いにくっつき合って転がり落ち、川の源となる。

荒廃した杉山を抜け、動物がひっかいたり滑ったりした木の幹や泥道を横目にしながら、カジカガエルの聲に満ちた流れを渡り、わたしたちはその沢にたどり着いた。明るい広葉樹が天蓋に葉を広げ、白い花々と瑞々しい草本が地面を覆う、北山のとりわけ美しい湿地。深い静けさと賑わいと、光に満ちている。桃源的なその沢までの道のり、小さな流れを渡るとき、山のスピリットについてふと言葉を交わした。北山の山中に僧侶をいざなった、白馬の伝説のこと。その白い精霊はきっと、太古の珊瑚礁からたちのぼっていたにちがいない。

都の香りは、脈動する種々の水の香りに満ちている。京の岬に立つあなたの袖を、風は吹き抜けてゆく。

参考文献：「鞍馬蓋寺縁起（くらまがいじえんぎ）」
地学団体研究会京都支部『新京都五億年の旅』法律文化社, 1990 ほか
初出：KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭2021 公式カタログ

京都府立大学大学院生命環境科学研究科准教授
松田法子（まつだ・のりこ）
1978年生まれ。建築史・都市史。住まい・集落・まち・都市における、人と大地の関係に関心をもつ。近年は「領域史」や「都市と大地」、「汀の人文史」というテーマに基づくフィールドワークや、ヒトによる生存環境構築の長期的歴史とそのモードを探る「生環境構築史」に取り組む。単著に『絵はがきの別府』、共編著に『危機と都市』、『熱海温泉誌』、『東京水辺散歩』、共著に『変容する都市のゆくえ——複眼の都市論』、『渋谷の秘密』、『世界建築史15講』、『戦後空間史——都市・建築・人間』など。京都市環境影響評価審査会委員もつとめる。

梨木神社で起きている事象から考察する、課題と変革について

梨木神社とは　京都御所東に位置する梨木神社には京都の三代名水の一つ「染井の水」という湧水の井戸があり、明治18年10月三條實萬公を御祭神として創建された由緒ある神社である。近隣から水を汲みに来る人が絶えず、料理屋などのプロの料理人でさえ、よく水を汲みに来るという。

梨木神社で起きている課題について

一方で、建物と土地の維持・管理には数千万単位の費用が随時必要となるため、その維持をするための苦肉の策として、敷地内にマンションを建設し、その収益を維持管理費用にあてている。当時、建設問題としてその話題が取り上げられる傾向が高かったが、神社の財政難は全国各所で同様に起きており、日本共通の社会課題とも言える。

なぜ、その課題を総体的に捉えた的確な情報が京都市内外へ伝えられなかったのか。または、それをなぜ「知ろうとしなかったのか」という問題もある。なぜ、それを社会の共通課題として共に解決策を考えてこなかったのか。今一度、梨木神社で起きていることを都市の課題における“縮図”として捉え、京都という都市の課題にある根本的な要因を洗い出し、共通の議論のテーブルに乗せ、解決策や再構築による新たな価値の創造について、あらゆる方向から考えていくことが今求められる。

梨木神社で起きている“場所の価値再構築”について

さらに、茶室空間などの保有建築物が文化保護規定の条例のため撤去することができず、さらなる修繕と維持管理が求められた。その際、建物を珈琲店・株式会社COFFEE BASE(本社：京都市中京区、代表取締役：鬼追善久氏)に貸し出す。株式会社COFFEE BASEは、水と井戸を守ることをコンセプト軸に据え店内の一部を改装し、2022年梨木神社店を開店。“軟水で甘く非常にやわらかい味わい”という染井の水の特性を最大限に活かした珈琲焙煎、抽出法を研究し、水と土地のストーリーとして、そのような場所で過ごしてもらう価値を顧客へ提供したところ、開店一年で国内外から多数の来客数があり瞬く間に人気店となった。収益の一部は店の運営費と神社の保全に当てられている。

同店ディレクターの牧野広志さんは、近隣のコミュニティにおけるコミュニケーションにもかなり力を注いでいると言い、近隣からも「この場所に人が訪れるようになったことが嬉しい」との声が寄せられている。近隣からもコーヒーを飲みに来る場所になった。それは、この場所でしか飲めない珈琲の味わいや空間全体の素晴らしさという価値だけではなく、井戸水の維持、丁寧な接客、この場所を通じた温かなコミュニケーションにより新たなコミュニティが生まれ、“パブリックの価値” という「場所性」や「意味性」が再構築された結果だと解釈することもできる。

牧野さんには、現在までに他店の珈琲店からも相談が寄せられ、全国で数十ヶ所のディレクションを手がけるが、それぞれの場所の特性にあった価値を提供することにこだわる。「梨木神社の美味しい水を他所に持っていって別の珈琲店で展開することは絶対にやらない」と語っており、常に、その土地、その場所に合った文化を生み出すことを追求し続けている。単一種などの豆にこだわったサードウェーブを京都の珈琲の新しい文化として広げてきた立役者でもあり、またそれを広めるためのそれぞれの教育や情報の伝達をありとあらゆる場所において欠かさず行っている。

株式会社COFFEE BASE ディレクター牧野広志さんのお話

井戸と水を守るために、お店を開く

ここの水源は溜池のように下に溜まっているものではなく、鴨川と同じように地下に何本か流れている水があり、そのうちの一つであると言われているんですね。

「この井戸と水を守っていくということ」が、そもそも弊社が珈琲店をスタートさせた経緯です。井戸の水が枯れることはないと言われているが、それもわからないじゃないですか。毎月、井戸の掃除とかもしているのですが、とにかくこの井戸を守りましょうということで、このお店の収入を色々なことに当てて、守っていくということをやっています。

場所の「水」という価値を活かした、新たな文化を創造する

この場所は「水」というものをもっていたので、水を使って新しいことをやっていって、文化のまた先へ行こうと、そういうことを考えたわけですね。

まず、京都は軟水です。これは、コーヒーにすごく合うんですね。ある大手企業のコーヒー屋さんも、すごく水の研究をしていて、このコーヒーにはこんな水が合うというところまでやってます。僕の知っているお店さんだと、お水にマグネシウムを入れたりして、それでコーヒーを提供するというところまでやっている。

ここの水は僕の個人的な感覚として、ものすごく甘くて柔らかいです。なので、コーヒーにめちゃめちゃ合います。コーヒー自体が京都の文化として根付いているので、いろんなことを含め、京都のコーヒーは日本一と言われています。点数、消費量などでも一番で。さらに先へ先へと文化として根付かせる。

飲んでいただいているのは深煎りだが、通常よりもスッキリとしています。お水も氷もこの水を中に直管で引っ張っていて、浄水器を一つかませてあるので、染井の水で作っています。うちは年間を通して水出しコーヒーを推しています。ホットコーヒーだと煮沸しないとならないので、水の成分が変わってしまうということがある。あくまでも、この水をダイレクトに味わってもらいたいということで年間通して水出しを推しています。

色々なところのアイスコーヒーを飲むとわかるのですが、氷がどうしてもカルキ臭くなってしまうんですよね。アイスコーヒーをつくるときは氷が溶けてくるとまずくなる。僕がアイスコーヒーを作るときは、氷は製氷機を使わずに自分たちでカチ割りを作る。そうすれば氷が溶けても味が落ちない。なおかつ、この氷が溶けるというのを前提でレシピを作ってます。なので美味しいです。氷が溶けて味のバランスが良くなります。

梨木神社の水を使うときに、いろんなところの水を持ち帰ってやったんですが、他所の水と比べて柔らかくて、甘いですね。牛乳にエスプレッソ入れるんですけど、浅煎りの焼きの浅いエチオピアとかで入れると通常の水でエスプレッソをしたときよりも、すっきりしてるっていうか、軽くなるんですよ通常よりも。それぐらい水によって抽出する味わいがだいぶ変わりますね。

他にも店舗はあるのですが、この場所だけでこの水を使っています。この水を他所に持ってやっていくということはしません。ここだけの特別なものです。変わってしまいますからね、意味が。他のところは、その地域の特性を活かしてやっていく。基本的に地域と密着してやっていこうということであって。

反対を押し切らなければ守っていけないという現実

この僕らが使わせていただいている建物は、旧春興殿（しゅんこうでん）という建物です。元々京都御所の中にあったもので、儀式ごとをやる時に色々道具を入れていた建物ですね。元々は2つあった建物の内一つが春興殿です。もう一つは柏原神宮に移されました。柏原神宮は残念ながら火事があり燃えてしまったため現存しているのはここだけです。

このように中をいじって営業することに対して、文化保護規定の観点など色々な反対がありました。こういうものを守っていくためには、お金が必要なんだけども本殿を立て直す屋根を綺麗にするなど、お金を出すとなったときに神社側の負荷が非常に大きいのですね。

弊社がこのプロジェクトに入りお借りして、梨木神社さん京都市と1年近く話し合いをし、外観はいじれないが中の一部をくり抜くことで許可をもらい、ようやく今この形でたどり着きました。水を守る、神社を守るという前提でこういう活動をやっているというフェーズです。

神社の収入源は、お賽銭とご祝儀、結婚式、御守り・御朱印帳・各種御朱印 授与品これしかありません。檀家もありませんので。そうすると何千万も捻出することは現実的に無理なんです。京都の神社には、こういう所がたくさんあります。どんどん汚くなり、壊れてしまうようなことがある。でも、有名なところは観光客が来るので収入源がある。そういうことで、宮司の多田さんはマンションを建てることをきっかけに色々なことをやっていった。そうしないと守っていけないというところまで、今来ている。

珈琲店ができたことで変容したコミュニティの在り方とは

うちの店ができる前は、この場所に来るのは一部の方だったんですよね。いわゆる「梨木神社＝水、マンション」みたいなものは知ってるけど、来たことないっていう方がとても多かったようですね。ですが、この店ができたことで、やっぱりすごい人の数が増えてお賽銭も増えました（笑）。でも、それによっていろんな補修ができています。植木屋さんが入れたりしてるんです。釣り銭をもって銀行にいくと手数料がかかる。うちは両替も必要なので、そういうこともまわして。両替所ですよね。お賽銭が増えて、木の手入れとか今までできなかったことができるようになってます。

これまで、この場所は裏千家さんや染井会さんが茶室として使っていたんです。昭和六十年に新しい茶室を作って、今も火曜水曜は先生が生徒さんへ教えられています。それ以外のときは、こちら側がこの茶室も借りており、中でコーヒーが飲めるようになっています。

このお店を作るときは、お茶やってる方々に嫌がられるかなと思ってたんですけど、全然喜んでくれました。僕らも掃除もするし、綺麗にしたりとか。だから終わった後にコーヒー飲んでくれたり、いろいろうまく協働はしてますよ。人が増えたことを宮司さんたちも喜んでいます。御所にいき、ここで休憩がてらコーヒーを飲んで、廬山寺にいく。今までなかった新しいコースができたと言われています。コーヒー屋が1軒できるだけでこれだけ変わるんですよね。

僕が怒られたこと？ ないですね(笑)。喜んでもらってる方が多いです。近所の方も買いに来てくれたりします。御所の方も来たりとか、皆さん喜んでくれてます。人が動くようになりました。うまくやっぱりちゃんと地域の方とコミュニケーションをとってやってるんで、一緒に掃除も出たりとかお祭りでたりとか。いろいろ近所のとこでご飯食べさせていただいたりとか。

場所の強みを活かして、新たな価値を創ること

こういう神社の中で一体型で、こういうコーヒースタンドがあるっていうのは、ないんじゃないですかね。ここまで完全一体化っていうのは今のところ、僕の知る限りではここだけじゃないかなと思うんです。

でもこれから増えていくと思うんです。珈琲店が出来たことで人が来るようになって。いろんな神社の方が相談に来ます。うちの神社にも作りたいんだけどと言われるんだけど、ここにはありがたいことに、この水があった。ただ、何もないところで、コーヒースタンドを作っても難しいと思うんですね。水という強みを持っているので、この水でコーヒーを淹れる。それを飲みたくて来る。海外の方もお越しならなられるんですが、彼らはこの水をエンペラーと呼ぶ。天皇の御水というストーリーを作って伝えたのか、勝手に海外の人に広まっていて。海外から来る方がとても多いですね。

店が大きくなればなるほど人もいるし、今のところはこの形をいかにちゃんとしていくかということに専念してます。また、もっと全国的にいろんな人に知ってもらいたいと思っています。それを今目指してますね。今後は夏場はこの井戸の水を使って、かき氷出したりとか、いろんなことを考えてます。基本的にお店で使ってる飲み物は全て炭酸もこの水を使ってます。

神社と色々やりながら、ここを守っていく活動をしています。月に1回掃除の日があって。みんなで井戸を全部掃除するのを一緒にやっています。染井を守ろうの会があるので。大体10人から15人ぐらいで井戸の掃除もするし、本殿の周りの草むしりもしますし色々なことをやります。一般の方もこの井戸を守りたいっていう方が集まってやってる状態です。地域の方もいれば地域じゃない方もいます。井戸ファンや温泉ファンもいますね。

年間70ヶ所以上の珈琲にまつわる場所を監修する、牧野さん

今57歳ですが、20代ぐらいからコーヒーをはじめて海外の方にしばらく行って戻ってきて、カフェを2001年に作りました。その頃、まだ浅煎りのコーヒーが主流でなかったなかった頃、浅煎りに触り始めました。お客さんからこのコーヒー酸っぱいとか、このコーヒー酸化してるとかいろいろ言われながらも、やり続けました。賃貸契約が2012年で終わるタイミングでお店を閉めて。

そのようなタイミングで、京都市立立誠小学校*のプロジェクトについて声がかかりました。PARASOPHIA(京都国際現代芸術祭)のビジターセンターになるので、海外の方にコーヒーを提供したいからと呼ばれまして。本当は期間限定だったんですが、人気があって、住民の方々からそのまま残って学校の中でコーヒーを淹れ続けることは可能かということを相談受けて。できますよっていうことを言ったら、すぐ配管を工事してくれて。さらにホテルになるアイデアが京都市から上がっているから一緒に考えてくれと。珈琲屋をやりながら、今のホテルになるまで、ずっといました。そのままホテルに残っててもいいよって言われたのですが。

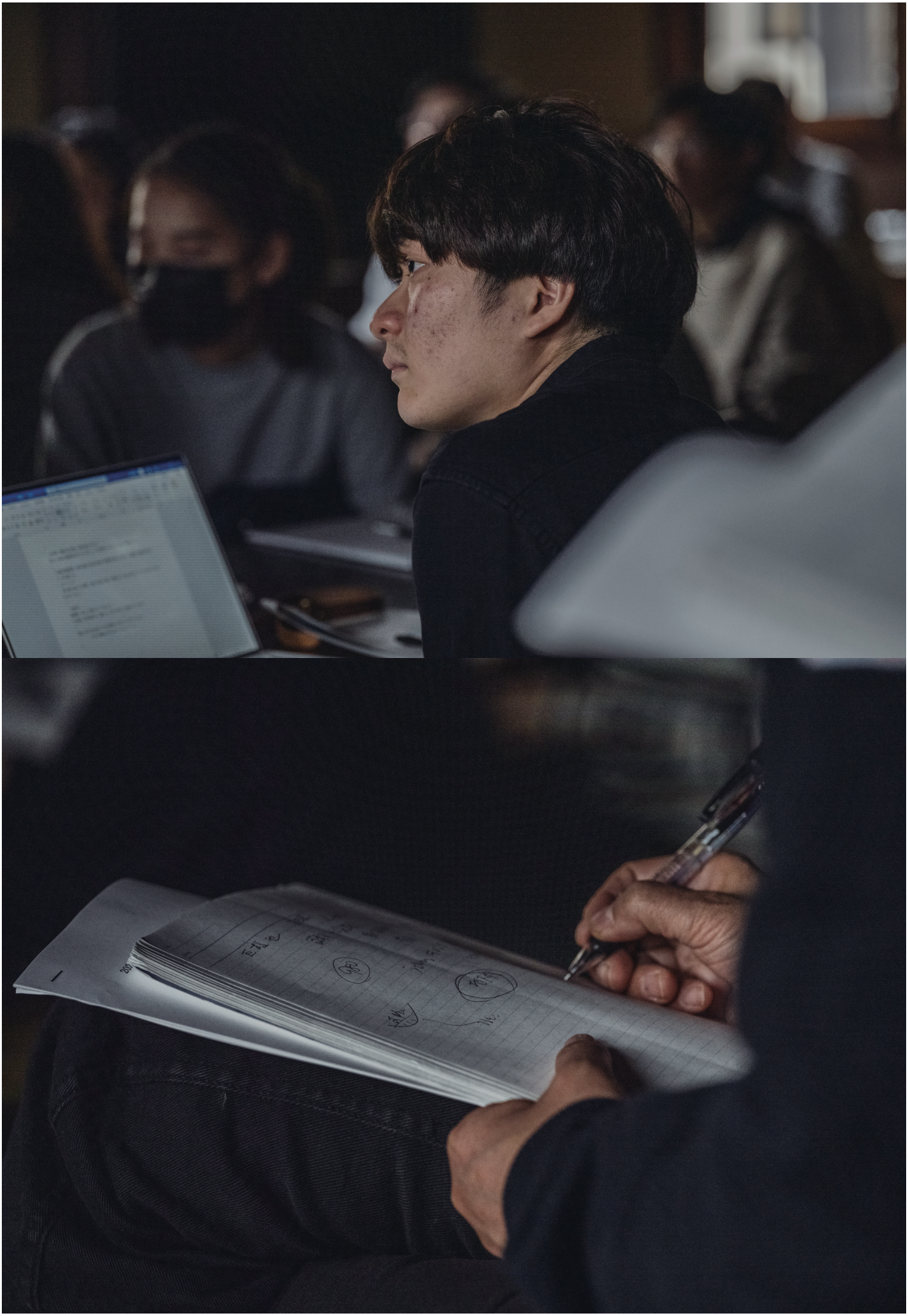
＊京都市立立誠小学校とは：京都市立立誠小学校は、現在の京都府京都市中京区蛸薬師通河原町東入備前島町にあった公立小学校。学制創設以前の1869年に開校した番組小学校（明治維新後、町衆たちの自治組織によって作られた学校）のひとつであり、1927年に完成した鉄筋コンクリート造校舎。保全・再生した既存棟と新築棟から構成され、ホテル、自治会活動スペース、図書館、商業店舗が共存する形で再開発された。

梨木神社に珈琲店を作るという話しがあり、ディレクションの一部をという依頼をいただいて、株式会社COFFEE BASEに移籍しました。店舗としては全国に5店舗あります。京都3店舗、大阪1店舗、東京目黒に1店舗です。6店舗目が長浜に出来る予定です。株式会社COFFEE BASEのディレクターとしては、今2年目です。

他にも、全国あちこち呼ばれてコーヒーを淹れたりしています。先月は和歌山、東京、奈良、福井とか色々と行きましたね。コロンビア・ワークス株式会社という会社が東京に初めて「早起きが楽しくなるマンション」というのを作ったんですね。サブスク・マンションで1階にカフェを入れていて、そこで部屋を借りてる方はモーニングとかコーヒーが無料です。入居者は別の入口から入れてコーヒーも飲める。そういう展開のサポートもしています。弊社では他でやってないことをどんどんやっていくという。

なんかね、人に好かれるんです。呼ばれるんです、あちこち。ここでやりながら、他のところから来てくれって言われます。ありがたいことです。ENJOY COFFEE TIMEというイベントも僕と友人とで立ち上げてやってて、京都駅ビルでもやっています。梅小路ポテル京都の中のコーヒーも監修しています。現在監修しているのが数十ヶ所ヶもあります。そちらからも呼ばれて宿泊者相手にコーヒーを淹れたり教えたりしています。

また、聞きたいことがあったら、何かあったらぜひ来てくれればと思います。



京都千年の地下水

関西大学環境都市工学部都市システム工学科地盤環境工学研究室 教授 工学博士

楠見晴重さん

profile

専門は岩盤力学、地盤工学、地下水工学。関西大学工学部土木工学科卒業。1982年関西大学助手、2002年同大学教授、2007年同大学環境都市工学部長、大学院理工学研究科長。2009年10月～2016年9月まで同大学学長。また、1990～1991年英国Imperial College客員研究員、2017年ポルトガル国立土木工学研究所Visiting Fellow。現在、関西大学環境都市工学部教授。文部科学省大学設置・学校法人審議会特別委員、文部科学省私立大学研究ブランディング運営委員会副委員長、(一社)日本私立大学連盟副会長、(公社)土木学会副会長、関西支部長、(公社)地盤工学会関西支部長、ISRM（国際岩の力学学会）専門技術委員、ISSMGE（国際地盤工学会）専門技術委員等を歴任。また、国土交通省道路防災ドクター等多数の公職に就任。2020年4月令和2年度文部科学大臣表彰科学技術賞受賞。主な著書に『岩盤崩落の考え方』、『ロックメカニクス』、『NHKスペシャルアジア古都物語 京都―千年の地下水脈』など多数。

「都市と水」の関係性から都市を捉え直すことを前提に、京都の内の水“地下水”がどのように形成され、使われてきたのかを把握するため、地形、歴史、文化的観点からの洞察や科学的観点からの解析結果を含めて、関西大学環境都市工学部都市システム工学科地盤環境工学研究室 教授 工学博士 楠見晴重さんからレクチャーとしてお話を伺った。また、実際に地下水の水源地である京都の地形を目で見て、実際に体感して把握するため、桂川、宇治川、木津川が合流する天王山と男山の狭隘部にも足を運んだ。

京都が都になったのは、地下水が豊富に湧き出る場所だから？

今日お話しする「京都千年の地下水」というタイトルについて、京都は千年経っている都ですが、都となった背景に「地下水」が大きな要因の一つにあると考えています。清水寺のすぐ下にある音羽の滝も、東山から湧き出る地下水ですが、この水も1000年以上枯れることなく、ずっと湧き出ているそういうお水でした。“井戸水の街、京都”という認識は、あまり浸透していませんが、色々なところで地下水を汲み上げる井戸や湧水の情景が「京都らしい風景」の一つだと捉えています。

京都と地下水の関わりについて、まずはじめに説明をしていきたいと思います。

生麩や豆腐などは、そのほとんどが京都の地下水で作られています。また、伏見では今から450年ほど前、室町時代からお酒を作りはじめています。京都では伏見以外でも洛中の方が酒蔵が多いときもあったのですが、洛中の酒蔵として今残っているところでは佐々木酒造さんぐらいでしょうか。京都市内には約30ヶ所程の酒蔵がありますが、ほとんどは伏見になりますね。

それから、茶道ですね。地下水は茶道とも大きく関係しています。京都の小川通りには、3つの千家があります。表千家、裏千家、武者小路千家がありますが、それぞれの家元には必ず井戸が掘られています。その井戸の水を使ってお茶を点てるということが永年続いています。中でも裏千家の「梅の井」は非常に有名な井戸ですね。

次に、産業ですが、染色や友禅などの産業にも繋がっており、鴨川や桂川で友禅流しを行っていました。風情があり良かったのですが、染料を落とす、流すことで川の汚染に結びつくことから禁止されました。染色業者は室内に人工的な川を作って、友禅流しを行っています。その水は地下水を利用しています。1日あたり相当量を汲み上げています。堀川通の東側に点在しています。川の水から地下水になったことで、友禅染の会社の方にお聞きすること、昔とは違った色が出てくる、新たな色が生まれていると言います。エルメスなどブランドとのコラボレーションなど、新たな動きが生まれているようですね。

世界遺産の下鴨神社では、毎年7月の末にみたらし祭の足つけ神事があります。敷地内には川のような水がありますが、お祭りの日に人々が蝋燭を持ち、水の中を歩くと一年間無病息災だと言われています。深く井戸を掘り地下水を汲み上げて流しています。上賀茂神社と下鴨神社が5月15日に行う葵祭は五穀豊穣を祈願するとともに、京都の水を守るお祭りでもあります。

初期の平安京の時代の京都御所は船岡山に鎮座していました。現在の京都御所の地は、当時高級官僚や貴族が住んでいました。貴族の館は、平屋建てで寝殿造です。広い庭に池を持つことが当時のステータスシンボルでした。池の水は上から細い水路からのものと、他に井戸からの地下水を使い、池の水を供給していました。池の周辺には樹木や草花を配置して、その風情を鑑賞するようになり、それが発達して日本庭園となったと言われています。そこで子供

が水遊びしたり、池に船を浮かべて月見をしたり、貴族や高級官僚は楽しんでいたと言われています。

二条城の日本庭園や、天龍寺の庭園など有名な庭がたくさんありますが、当時の平安京の状況が残っているのは神泉苑です。当時の平安京の池が残っていると言われています。当時の平安京には大きな川は無く、宇治川、木津川、桂川は、平安京の中心地から離れており、当時の鴨川は雨によってすぐに氾濫し、暴れ川と言われていました。今の鴨川は南北まっすぐのびていますが、これは昭和初期に河川の改修をしましたので、人工的な川なんですね。

このように京都は、産業、食文化、伝統文化そのものが地下水と関わっていることが多いです。

「都市と水」の関係性を考える

ここから世界を見てみますと、「都市と水」ということで、世界の4大文明、エジプト、メソポタミア、インダス、黄河、それぞれの文明は大きな川の縁で生まれています。エジプトはナイル川、メソポタミアはチグリス・ユーフラテス川、インダスはインダス川、黄河。文明が発達するには大きな川との関係が深いのです。
一方で、日本はどうでしょうか。例えば荒川、淀川、木曽川など、東京、大阪、名古屋には大きな川がありますが、昔の日本の都である京都や奈良には大きな川はありません。なぜ昔の人は大きな川がないところに都を定めたのでしょうか。盆地だからという理由で京都を選んだとされています。つまり、昔から地下水に注目をされていたのではないかと言えるのではないでしょうか。

なぜ、京都は地下水が豊富に湧き出ているのか？
科学的な分析の結果、明らかになった「水盆」の存在

ここから科学的な話になります。なぜ、京都に地下水が豊富にあるのか。京都の地下を見てみたいと思います。

地下の構造を解明するために、先端技術を使用して地下の可視化を試みました。地下の構造をどのように解明するか？ 立体的なデータをとるためには、“水を通さない基盤岩層”を探る必要がありました。
京都全域を把握すると、宇治川、桂川、木津川と、3つの大きな川が天王山（京都府乙訓郡大山崎町の山で京都府西側エリアに位置する）に集約されています。川の反対側に位置する男山山頂には石清水八幡宮があります。

天王山は“古生層（こせいそう/日本列島の骨格をなしている古生代シルル紀から中生代ジュラ紀（約4億4000万～1億4300万年前）にわたる地層）”という地層で、この辺りの地層を丹波層群と言いますが、その特性としては砂岩（さがん）と頁岩（けつがん）で構成されていることです。京都盆地の基盤岩は、基本的に丹波層群古生層から成っています。この古生層は水を透し難い層で不透水層を形成しています。その上に砂礫層と粘土層が互層となっている大阪層群が厚く堆積しています。
天王山と男山の狭隘部には、桂川、宇治川、木津川が合流して淀川となって大阪湾へと流下していきますが、この狭隘部は古生層から成っている天王山と男山が地下で繋がっており、自然に形成された地下ダムのような地層となっています。京都盆地の地下水は、広く堆積された大阪層群に賦存されており、最も厚く堆積している旧巨椋池付近で約800ｍとなっている。また地下水の出口は天王山―男山の狭隘部で幅約1㎞、深さ30ｍ程度です。これらは京都市内と八幡市内で行われた弾性波探査と京都盆地で行われた重力探査結果、ならびに京都市内で行われた学術ボーリング結果のデータから解析されました。

解析の結果、京都盆地は南北33km、東西12km、基盤岩までの最大深さ800m、ラグビーボールを半分に切ったようなイメージの形状で計算していくと、京都盆地の下には約211億トンの水が溜まっていました。琵琶湖は約275億トンと言われていますので、それに匹敵するぐらいの水が溜まっている。
京都は周りは山に囲まれているからこそ、保水力があるから地下水が豊富だと言われていますが、東山や北山、西山だけで、これだけの水量を確保するのは当然無理です。何が大きいかと言うと、淀川水系の宇治川は琵琶湖に通じている。琵琶湖に入る川はいくつかありますが、出口は瀬田川しかありません。瀬田川から宇治川に入り、三川合流をしている。降った雨は、木津川、桂川から山川合流地点に集約されていく。しかし、全ての雨が浸透するというわけでもなく、地下に浸透したりしている。大きく見れば、地下に浸透するのは1/3、河川に流れるのは1/3、蒸発するのは1/3ほどになります。都会で降った雨は地下に浸透しません。ほとんどが地面がアスファルトですから。ほとんどが表面流出になってしまいます。田んぼや森林は地下に浸透しています。
平安時代には井戸を掘る技術というのは、当然基本手や簡単な道具で掘っていたので、せいぜい数ｍ程度であることからごく浅い地下水を使っていました。京都市内のボーリングデータ約7553本分を対象として、その全てを地表から5mまでの砂礫と粘土の分布を調べました。一般的に利用する地下水は砂礫層から汲み上げます。砂礫層を浸透する地下水は自然に濾過されていますから、昔でしたらそのまま飲料にしても問題が無かったと思います。したがって、地表面から深さ5mまでの砂礫層の割合を調べることによって、良質な地下水であるかどうか大方わかります。そして調べた結果、下鴨神社、現在の京都御所あたりは、砂礫層の比率が高いことから、比較的良質な地下水を確保できたと思われます。

京都は、かつて海だった

地層は上にいくほど比較的年代も新しく、元々が陸上であれば砂や砂礫が堆積されていますが、海や湖だと粘土層が堆積されます。京都盆地の基盤岩は丹波層群古生層から成り、その上に砂礫層と粘土層が互層となって厚く堆積していると先ほどお話ししましたが、そのような分析から京都はおよそ4回程度海になっていることが分かりました。4つの層は海であった時に堆積した粘土「海成粘土層」と言い、それは京都盆地が少なくとも4回海になっていた証拠とも言えます。
この現象の要因は地球の温暖化、氷河期です。南極の氷が減ると地球全体の海水位が上がります。南極の氷が増えると水位が下がります。関西新空港を建設する際に調査をしたら、氷河期時代は淡路島の南側あたりが海岸線であったこと、淀川は淡路島の南の方まで流れていたことが分かりました。
このように京都は陸と海になることを繰り返して、やがて大きな盆地が形成されていきました。地球の年代は約48億年と言われていますが、古生層は約4億年～1億年。地球年代から見ると古くはないですね。

世界では、水メジャーの時代が始まっている
水が潤沢にあるはずの日本は、実は世界の水を搾取している状況にある

ここから、今の時代の話をしていきますが、20世紀は石油の時代と言われていました。車や化学繊維ができたりしました。21世紀は水の時代と言われています。2003年6月に先進7カ国が「先進国サミット」をフランスのエビアンで開催しました。当時のフランス首相のシラクが「21世紀は水の時代」といいました。水が色々な面で、中心に回っていくと。地球上の水は約14億km^3（立方キロメートル）です。97.5％は海水。2.5％は淡水ですが、そのほとんどが地下水や南極などの氷河です。人間が容易に使える川や湖の水は0.01％程度しかありません。

限られた資源ですから、水は足りません。特にアジア、アフリカの31カ国が絶対的な水不足と言われています。それが来年2025年度は48カ国に増えると言われています。地球の人口は80億を超えていますが、人口増加に伴い、限られた水の奪い合いが発生すると考えられます。石油メジャーならぬ、水メジャーを作ろうとしています。水を支配したものが世界を征すると言われています。

現在は、地球から水がなくなる日を「DAY0（デイゼロ）」と呼んでいます。アメリカでは、オガララ帯水層という豊富な地下水が発見されたことで、乾燥地帯から穀倉地帯に一帯を開発しました。それまでは五大湖のうちの1つと同じぐらいの地下水が溜まっていたのが、地下水が汲み上げられて、枯れてきています。1年で1.5m低下している。20％はもう持続不可能な状況になっている。

カンザス州は放牧がすごく有名ですが、牛肉の加工や飼育によって大量の水が消費されています。ハンバーグ一個作るのに必要な水は1700ℓ程度。肉食は大量に水を消費します。コロラド川の上流域も水がなくなって枯れています。

アマゾンの森林伐採も水不足の原因です。豊富な森林、熱帯雨林によって、光合成がおこり、二酸化炭素を吸収し酸素を放出し、気候を安定させてきました。この森林では雨がたくさん降り、潤沢な水が生まれていた。しかしながら、アマゾンでは違法伐採が行われています。毎分、サッカー場ほどの広さの森が消滅しています。このぐらいのスピードで森がなくなっている。これが大きな問題で、森林伐採が行われているアマゾン川はこれまで枯れるようなことはありませんでしたが、近年、水位がかなり減少しています。
自然に発火する山火事も一因です。山火事が毎年世界各地で起こっています。カナダの森林火災で消失した面積は東京以上でした。オーストラリアもそうですし、毎年のように森林が減少しています。世界はこういう状況です。
日本でも樹木を伐採するようなことが起こっています。再生可能エネルギーによる太陽光発電を政府は進めています。日本は山間部が70%、平野部が30%。太陽光発電は、木を伐採して斜面にパネルを設置している状況です。集中豪雨で太陽光発電が水没すると感電してしまいますが、太陽光発電の2割が災害の恐れがあるようです。太陽光は民間に任せられていて斜面につくられている。違法に許可を得ずに森林を伐採し、パネルを設置している状況も多い。電力を生み出すためには原子力発電の場合一基100万キロワット程度となりますが、太陽光パネルで100万キロワット発電しようとすれば、東京の山手線内側ぐらいの面積が必要になってきます。風力発電の場合は、その3~4倍の面積が必要となります。東北の白神山地に150基の風力発電を作ろうとしたが、木を伐採をして設置しようとして反対されたという事例もあります。このような状況が続いています。森林を保護しないと、ワイルドファイアになるなど、森林がなくなってしまう。DAY0に近づいています。
2003年に京都を中心に大阪、滋賀で行われた環境会議「世界水フォーラム」が開催されました。浄化された飲料水が簡単に提供されているのは世界で10箇所くらいしかありません。日本はその中に入っている。水道水も飲める。そういう国は本当に少ないんですね。一方で、日本は世界の水をたくさん使っている。日本は肉類などを輸入していますが、バーチャルウォーターといって、牛を飼育すると水をたくさん使います。綿製品や豆類など輸入元では水をたくさん使っています。それらの水を間接的に輸入しているとしたら438億t/年日本人は水を結構使います。4人家族で1日1tを使用している。水洗トイレや風呂などで利用しています。途上国は100ℓ程度です。途上国は1/3以下。50ℓを確保するのに、片道3時間かけて水を確保している地域もあります。
日本は自給率を高めなさいと言われています。日本は世界の水を搾取する状況が続いています。水に対して、日本人はもっと色々なところに意識を持たなければならないですね。

社会的共通資本としての水（前編）

琵琶湖疏水と京都
先人たちが築き上げた“路”を歩く

2日目のフィールドワークでは“京都と琵琶湖の繋がり”に着目し、琵琶湖の湖水から京都に水を流す水路として明治期に作られた「琵琶湖疏水」を実際に歩きながら体感した。100年以上経った今も現役の設備として使われている水路を歩き、水路を流れる水の音を聴きながら、身体的、感覚的に「水」を体感することは、先人たちが築き上げてきた“路”を知ることでもあり、社会の豊かさや人々の暮らしを豊かにすること、将来世代へとその価値を繋いでいく“志”に触れることでもあった。

ルート

蹴上インクライン（けあげいんくらいん / 疏水上流の蹴上船溜と下流の南禅寺船溜を結んだ全長約 582m の傾斜鉄道）
↓
水路閣（すいろかく / 南禅寺境内にある琵琶湖疏水の水路橋で上部の水路には水が流れている）
↓
南禅寺船溜 (なんぜんじふなだまり / 停船場として荷物の積み下ろしなどに使用)
↓
疏水分線（そすいぶんせん / 熊野若王子神社から銀閣寺に至る疏水分線沿いの遊歩道は哲学の道と呼ばれる）
↓
鴨東運河（おうとううんが / 山科運河と鴨川運河を結ぶ運河）

ルーツの再定義　琵琶湖疏水を中心とした都市のイノベーション

明治維新により首都は京都から東京へ。衰退した都を当時どのようなビジョンと都市戦略によって再出発の道を生み出したのか？　歴史地図を元に、歴史、地理、文化的背景を重ね合わせながら考察された「京都・観光文化時代MAP (Time trip map)（光村推古書院 2006年発行）」を参考に、明治期における一大イノベーションとして、その軌跡を振り返る。

第一期　明治初年～14年

「京都策」という近代化プロジェクトが人材育成と産業育成を二本柱にスタート。全国に先駆けて、小学校が開校し、中等・女子教育も推進された。産業にも西洋の知識と技術が積極的に取り入れられ、ジャガード織が西陣織に、洋式製陶法が京焼に導入されるなど、伝統産業も着実に近代化を進めた。

第二期　明治14年～28年

琵琶湖疏水の開削がこの時期の一大事業。疏水の完成によって船での物資運搬が盛んになり、水力発電所も生まれ、京都の工業化は大きく進んだ。明治28年、遷都1100年祭と共に開催された内国勧業博覧会では、水力発電を利用した日本初の路面電車を走らせ、京都の再生ぶりを内外にアピールした。

第三期　明治28年～大正初期

明治末に京都市は外債の発行など大胆な外資投入により、都市基盤整備のための三大事業（第二疏水開設、上水道整備、道路拡築と電気軌道敷設）を打ち出す。現代京都の都市基盤もこの時期にほぼ出来上がった。古きを生かし、新しいものを創造する、その相克と相乗が今日にも生きる京都の伝統であり、歴史である。

琵琶湖疏水がもたらしたもの

琵琶湖疏水は、舟運、水力利用による殖産興業に始まり、田畑のかんがい用水、防火、飲料水など、多くの用途をもたらした。さらに、京都にさまざまな「日本初」を誕生させた。中でも水力発電は近代化牽引の最たるものだった。当時国内では、東北で自家用発電が試みられていたものの、公用の事業用水力発電所は京都が日本初、米コロラドに次ぐ世界二番目となった。実用化された電力は、紡績、伸銅、機械、タバコなどの新興工業の動力となり、街に電灯を灯し、路面電車を走らせた。時代と共に利水の用途は変わったが、現在も市民の上水道として生き続けている。また、円山公園の瓢箪池や平安神宮の神苑の水、そして、南禅寺付近の多くの庭園の池なども疏水の引水によってつくられている。疏水とその周辺は景観も美しく、今日では京都の歴史と一体となった近代文化遺産として、市民や訪れる人に潤いをもたらしている。

Keynote Speech

社会的共通資本としての水

2日間に渡って都市の水をめぐるリサーチツアーを実施し、ツアーの最後にはパネルディスカッションを実施した。ここでは、水を通して、私たちはどのように社会的厚生（Social Welfare）という社会全体の幸福を捉えていくことが望ましいのか？ それらをどのように都市戦略へと活かしていくことができるのか？ そのような洞察を深めるためにも、経済学者・宇沢弘文氏が提唱した「社会的共通資本」について、宇沢国際学館代表取締役占部まりさんからお話をいただき、さらに「琵琶湖の保全と政策について」滋賀県庁琵琶湖保全再生課副主幹 小林匡哉さんに実例をもとにお話をいただいた。

「社会的共通資本とは？」

宇沢国際学館代表取締役 占部まりさん

社会的共通資本とは何か？

今回のテーマは「水」でしたね。日常生活での水というと蛇口から捻って排水溝に流れる水として、わずか数十センチの水しか見ることしかできないけれども、今回は様々な水を見ていきました。琵琶湖疏水は琵琶湖から京都市内に流れて入って来る水源近くから、ずっと疏水沿いを歩いて鴨川まで辿り着いていくことも、すごい経験だったなと。それから、神社の湧水など文化を育んでいける様々な水もありました。そういったものもありました。今朝も、虹がかかっていましたが、虹も水から出来ていますし、水源、雪、川、そういったものも、すべて水から出来ている。水は大事なものでもありながら、綺麗な水が飲める国ばかりではない。日本でも、水道管の破裂リスクがでてきています。水道はすごくインフラコストがかかるので、老朽化しているところは市町村の予算で補修できない、そのような状態になってきている。一方で、日本の仮想水（バーチャルウォーター）の輸入量は非常に大きなものになっている。専門家の楠見先生からお話がありましたね。

こういった生活に欠かせない水をどうやって守っていこうか、水を含め『社会的共通資本』として考えようとしたのが、私の父、宇沢弘文（うざわひろふみ）です。

社会的共通資本とは、一つの国ないしは特定の地域に住む、全ての人々が豊かな経済生活を営み、優れた文化を展開し、魅了ある社会を持続的、安定的に維持することを可能にするような自然環境や社会的装置のことを表します。要するに、豊かな社会を支えるものを社会的共通資本として考えましょうと。豊かな社会にするためのものはたくさんありますが、水、空気、食料、道路、電気、交通、水道、教育、医療、金融など、社会的共通資本として国や地域で守っていこうということなのです。

市場は、必要な人が多ければ多いほど価格が上がってしまうシステムになっています。大事なものを国が一元的に守っていこうとすると、それは社会主義で良いのかという話になっていきますが、多くの社会主義の国が崩壊していることからも分かるように、あまり上手くいかないのではないか、と。人間の特性にあった資本主義を活用して、新たな社会を考えていこうというのが社会的共通資本の根源的な考え方なのではないかと解釈しています。

今、「新しい資本主義」について色々と言われていますが、資本主義も良いところがあり、一つにはイノベーションが起こりやすいということがまずありますね。私自身の専門分野でもある医療の領域においては、公衆衛生の向上については資本主義がなかったら多分起こらなかったですし、コロナワクチンのスピード感についても市場があってこそ成り立ったもので、これも資本主義の恩恵だと思っています。

父は、「資本主義の労働力の搾取は社会主義よりはマシ」と言っていました。市場のリミットがかかるから。社会主義はトップが決めたら労働力をいくらでも使えてしまうのですが、資本主義では、例えば児童労働のカカオ豆を買わないと市場が決めてしまったら、生産者は絶対に変えなくてはならない。そういった意味でのリミットがかかるから、マシなのだといっていました。そのような特性を活かして社会をどのように作って行くのか。資本主義は格差を拡大するという特性も持っているので、そういったものも包含的に深めながら新たな社会を作っていきましょうというのが、この社会的共通資本の考え方です。

企業の特性としては利益を求めることが第一の目標になってくるわけですが、利益を求めながら豊かな社会に繋がっていく、そして、社会にどのような影響を与えるのかを常に考えることが大事だということが考えの根底にあります。

経済において最も重要なのは「人間の心」である

そもそも経済は人間の心があって初めて動き出すものです。経済に我々が翻弄されているように思えますが、経済行為自体は人間の心が動き出して初めて動き出すものなのです。このような考え方は、父が昭和天皇にご進講した際に「君は経済経済というけれども、人間の心が大事なのだと言いたいのだね」と仰っていただき、ああそうなんだという、父はそのような気持ちになったということでした。

「こころ」という考え方は非常に複雑なのですが、英語にするとHeart、Mind 、Conscious、Spirit、Sentimentなど様々な意味があるんですね。漢字の「心」というのは、紀元前450年頃に出現したと言われています。有名な孔子の「四十にして惑わず」という言葉について、実は心という部首のあしがなかった、ただ単に「枠」という意味であったのではないかと能楽師の安田登先生が分析されています。つまり、孔子の言葉は40歳になったら枠を外しなさいよという意味で、昔の人は60ぐらいで亡くなるから、40で惑わなくなる、50で天命を知るというシステムになっていたのかというとそんなことはなくて、40になっても同じように惑うこともたくさんあったはずで、40になった時に、それまでの成功体験や枠組みから外れなさいよということが孔子の教えだったのではないかと、そのように解釈すると非常に分かりやすく、腹落ちする表現ですよね。

父は、40歳までに構築した数理経済学という枠から外れて、豊かな社会とは？　ということを考え続けた経済学者なのです。そこでは、「すべての人々が、その先天的、後天的資質と能力を充分に生かし、それぞれのもっている夢とアスピレーションが最大限に実現できるような仕事にたずさわり、その私的、社会的貢献に相応しい所得を得て、幸福で、安定的な家庭を営み、できるだけ多様な社会的接触をもち、文化的水準の高い一生を送ることのできるような社会」として定義づけをしています。元々数学者だったので、このように定義についても丁寧にしてあるわけですが。

こちらは、住民一人当たりの生活保護費についての集計です。大阪市が生活保護の人を吸収できる体力があるということでもあるのですが、一人当たりの費用として年間12万円拠出しているんですね。それが、新潟県小千谷市になると一人当たりの拠出費用が5,800円という数値になっているのですが、ここから見えてくることとして、里山資本主義を提唱する藻谷浩介さんによると、お金以外の資源も豊富なので生活に困りにくいのではないかという分析をされています。そうすると、お金に換算されないものの価値、むしろ、できないものの価値の方が現在重要になってきているのではないかということですね。

ところが、価格がつかないものは経済学では扱いにくいのです。自然、子供といったもの、子供は市場には乗りませんので、基本的には市場に乗らないものは、経済学では軽視されてしまう。でもこういったことが大事だから守らなければならないよね、というのが社会的共通資本という考え方で、この重要な柱となるのが、自然環境、制度資本、社会的インフラストラクチャーの3つの軸です。

自然は古典派経済学からは無視されていた。父・宇沢は、自然というものがないと人間は生活できない、だからちゃんと考えなくてはならないと言い始めた初めての経済学者だったわけです。このような大切なものを社会的共通資本とするのです。一方で、今現在誰もが必要とする、需要が途切れることがない、そうすると、値段を上げれば上げるほど買わなくてはならないので、利益も上がってくるというシステムでもあるわけです。その反面、実は心身涵養しようとすればするほど、利益が生まれづらくなる。

自分の想像が及ばない人々も共に暮らす社会の仕組みを考える

例えば、日本の医療システムは、前提として患者がいないと成立しないシステムなんですね。究極の目標は国民みんなが健康になるような生活を医療者が支えるとしたら、今のシステムだと病院は破綻してしまう。なおかつ、こんなに大切なものなのですが、私的所有が許されることが非常に大きな特徴です。日本の病院の７割が私立です。国の一元的な管理ではできないような細かな動きができる。コロナ禍において、国がワクチンも、治療費、検査も無料にしますというシステムを提供した際に、先々はプライベートな病院等々が状況に応じて運用していけたということが、日本のコロナの対応では世界では優等生であったのですが、そういったことが関係しているなのかなと思っています。

社会的共通資本を国や地域、みんなで守っていくことの意味とは、大切なものをお金に変えずに済む、自分の想像力が及ばない人々も守ることができるということなのではないかと思っています。人間はすごく想像力が豊かではありますが、地球上に存在する70億人、全ての人を想像して社会制度をつくることはできない。でも、自分の想像が及ばない人々も暮らすことができて、暮らす権利があることを守る試みだったんじゃないかと。

誰一人取り残さない社会、SDGs。カラフルな分かりやすいインパクトのあるポスターなのですが、これらを採択するときに、十七のゴールがバラバラに見えないか？ 十七のゴールが有機的につながることによって初めて誰一人取り残さない社会を作る、そういったメッセージ性が薄いのではないかというディスカッションがされたそうです。私はこれらを有機的に繋ぐものが社会的共通資本だと思っています。

1991年に、父がローマ法王とお話をさせていただいた際に、人間はこの100年の間、資本主義と社会主義の間を行ったり来たりしながらしているけど、社会としては豊かになっていないよねというお話をさせていただきました。この会場にもいらっしゃった国連顧問のジェフリー・サックスさんが中心となってSDGsを作っていますし、彼は父の愛弟子のスティグリッツ教授とも非常に仲良しで、SDGsとは、社会的共通資本という考え方の影響を受けているのではないかと私自身は解釈しています。

国が富む、経済学の源流を振り返ることの重要性

経済学の学問を振り返ると、いろいろなことが見えてきます。アダム・スミスという人が経済学の父と言われていますが、著書・国富論において、道徳感情論というものを書いています。社会は共感から成り立つ。感情、心があって、社会が成立している。国富、つまり、国が富むとは、国民、文化を表す＝Nationであって、国家、政治＝Stateではないのです。国民や文化をどのように豊かにできるのか？　ということが、本来の経済学という学問なのです。昨今の数字ばかりを追っているのは違う、と。

この流れを汲むのが、ジョン・スチュアート・ミルです。彼が提唱したのが、定常状態です。経済指数が右肩上がりでなくても成立する豊かな社会、人々がイキイキと暮らすこと、それを目指すのが経済学であると。経済成長させることが目的ではなかったというわけです。

昨今、再び話題になっているマルクスについては、父は人間が不在であるとしていました。労働者と資本家という階級があるのだけれども、人間が不在であるというのが問題であると。父は、社会的共通資本を守ることの意義を抽象的なまとめ方をしています。人間の自由と尊厳を守ることが目標なのではないか、と。魂の自立という言い方をしています。簡単にいうと、ということですが、どんな人でも助けを借りられなければならない。助けを借りながら、お互い助け合って生きているという社会をうまく支えるためにはどうしたらいいかと。

シカゴ大学の、父の論敵でもあったミルドン・フリーマンは「選択の自由」ということを書いています。市場に任せていれば社会がうまくいくに違いない、黒人の学生が少ないのは高校時代に遊ぶことと勉強することを天秤にかけて遊ぶことを選んだんだから黒人の大学の入学が少ない、大学生が少ないと言ったわけですが、そのときに黒人の学生から「先生。そうは仰るけれども、わたしは両親を選ぶ自由がなかった」と言われたと。ミルドン・フリーマンは愕然としたと言います。

実は、我々は、自由に選択をしているように見えて、社会に選択させられている要素が大きくて、新自由主義において、選択できるものは買うか、買わないかだけであって、非常に狭いのです。

ここで宇沢がなぜこのような考え方になったのかに触れておきたいのですが、高度成長期の日本の変化が原点になっています。父はアメリカで研究生活を10年以上していて、日本に帰ってきたら、高度成長期で数字の上ではものすごく成長していたにもかかわらず、実は豊さを失っていた、弱者の犠牲の上に成り立っていた数字だった、水俣病など、経済成長の陰で犠牲になっている弱者をを目の当たりにし、数理経済学の限界を感じました。

みんなのためというと、必ず弱者が犠牲になる。それはどうしてかというと、想像力が追いつかない。あえて忘れるという認知不協和という人間の認知のシステムが影響していると思っています。認知不協和はレオン・フィスティンガーという心理学者が言っていたのですが、彼はシカゴ時代にご近所さんで、日本贔屓で父に安部公房を読むように言ったのも彼だったぐらい仲良しだった。社会的共通資本の理論の中には、こういった脳科学的な人間の特性も入れ込んであると思っています。

みんなのためとなると、ベーシックインカムということが昨今話題になりますが、ベーシックインカムのことを父はダメだと言っていたんですね。例えば、ウクライナ危機で、10万円が昨年配られたとして、昨年その金額で買えたものも、今年買えるかというと、買えないですよね。このようにお金で渡すと、必要なものから値段が上がっていってしまうことが大きな問題です。

高い倫理観を持って、最善を尽くす
教育や医療に求められる、社会的共通資本の考えとは

ベーシックインカムで、特に問題だと感じているのが、教育です。教育に対して価値を感じてもらえない家庭に生まれていると、教育に対してお金を出してもらえないのですね。北欧諸国のように、公的に教育が充実しているところだといいのですが、非常に日本の公的なベースラインはいいのだけども、公平なのかというとそういうことではない。数年前に東京大学の保護者の家庭の収入を調べたら、1000万を超える家庭が７割だったと。これは、普通の家庭の倍なんですね。

そう言った意味合いからすると、すごく均一になってしまう。これはすごく危険です。教育とは子供達に多様な人々と出会い、その能力を伸ばせる場所を提供する、魚に泳ぎを教えるのではなく、自由に泳げる場所を提供することなんです。

その流れから、葛藤して書いたのが「自動車の社会的費用」（岩波書店、1974年発行）という本です。交通事故で亡くなる人の数をお金で換算するのではなく、亡くなってしまったら、もう取り戻すことはできない。そうであるならば、交通事故が起こらない都市を作るのが車から恩恵を受ける人がすべき役割であると説いています。数年前に韓国や中国でも訳されています。これから社会を作ろうとする国に影響があると嬉しいなあと思っています。

ここで、私の専門分野の医療の話をしたいと思います。医療はサービスではないと、父は言っています。臨床30年していますが、本質的に死にたいという人はいないです。痛みがなければ、病気がなければ生きていたいという人がほとんどです。

ですが、人はいつか必ず亡くなるので、サービスとしては破綻してしまう。困ったことを医療者に託し信任される。それに対して最善を尽くすということが一番重要であると。これが社会的共通資本の「管理」ということにつながってくるのですが、専門家集団によって高い倫理観と知識を持って運営されなければならないことを意味します。ここでは医療の流れで話していますが、疏水という水も当時の専門家が高い倫理観を持って自分達の努力によって最善を尽くすということがなされていた。非常に素晴らしい場所だなと感じました。

また、管理については、上から目線、官僚的であってはならないということを言っておりました。高い倫理観と緻密な臨場感を持っている医療従事者が医療をやっている場合には、医療が経済に合わせるのではなく医療に経済が合わせていく、そんな社会システムを作ることが経済学者の役割であると。

病院はそこにあるだけでいいと言っていましたが、自然もそこにあるだけでいい。しかし、自然はそのまま放っておいてもいいものではない。医療が温暖化に寄与する割合は5％ぐらいあるのではないかと言われていて、高度医療を諦めるのではなく、健康になることで地球温暖化対策に寄与できるのではないか、むしろその方向性の方が良いのではないかと思っています。

孤独が健康に及ぼす影響は非常に大きい。例えば、タバコに例えると、1日に15本。80歳代の幸せは50歳代の周囲との良好な人間関係にのみ因果関係があり、病気のあるなしは関係ない。これはアメリカのデータなので、日本でも同じとも言い切れないのですが、75歳以上の急性心筋梗塞の患者さんの死亡率です。誰も見舞いに来なければ、死亡率は69％、お見舞いに来る人の数が1人だと43％、２人以上で26％まで下がる。医療体制を整え、新しい治療法を開発したとしても、これだけのインパクトは絶対に出すことは出来ません。

分かり合えなさを超えていくところに、本当の豊かさがある

実は、人との交流だけではなく、自然との対話、自然環境に身を置くことでも、より重要になってくる。森林浴は、50歳代の血圧の高い男性が森林浴のプログラムを2泊3日体感し、その後、2～3週間も血圧が下がる効果が持続する。そして、なおかつPCの壁紙を森に置き換えることだけでも血圧が下がる。そういった関係性も出ています。おおいなるもの、例えば雄大な自然を見ていると、人間、“謙虚さ”が頭の中で発火し、クリエイティビティが上がるんですね。自然というのは、そこに当たり前に存在していながら人間に対してさまざまな影響があります。

コミュニティというのは、ハグしたりすると分泌される、ハッピーホルモンのオキシトシンによって深められます。オキシトシンで結ばれた人というのは、そのグループの外の人に対して攻撃性が上がるのですね。さらにいうと基本的に人間は分かり合えない部分がある。それを超えていこうということを考えていかないとならない。そして、豊かさとは何か。豊かさとは余剰であり、余剰とは、見返りを求めずに与えられるものだと考えています。昨日訪れた梨木神社は非常に豊かだと思いました。人との繋がりが大事ですね。

精神科医の森川すいめいさんが書いた「その島のひとたちは、ひとの話をきかない」これは自殺者が少ない地域のお話なのですが、こいった地域には緩やかなつながりがある、タイトなつながりというのは数多く持つことはできない、タイトになるとルールを作りたくなったり、攻撃したくなったりする。だからこそ、これからの社会においては、緩やかなつながりというのが大事なのではないかということが書かれています。受け入れられる、受け入れる経験をより多く積めるような社会。

ベネッセアートサイト直島はベネッセホールディングスの会長、福武さんが作られた瀬戸内海の島にあるアート施設ですが、ここは、福武さんの現代資本主義に対する怒りから、現代アートを武器に闘おうとした場所なのです。このような風光明媚な瀬戸内に本土に置きたくないような工場やゴミを捨てたり、ハンセン病患者さんを隔離する、そのような場所に人間がしてしまったことに対する怒りなのですね。

これは直島の無限門という李禹煥（リ・ウファン）さんの作品なのですが、この金属の板で区切られるだけで、この自然の風景がより鮮明に見えてくるんですね。社会的共通資本は、私は無限門のような“フレーム”だと思っています。豊かな社会を考える枠組み。その大切さは往々にして社会的共通資本を失って初めてわかる、そのような悲観的な文脈ではなく考えていく試みが社会的共通資本だということです。

「琵琶湖の保全と政策について」

滋賀県庁 琵琶湖保全再生課副主幹 小林匡哉さん

400万年にわたり受け継がれる、琵琶湖という豊かな水源

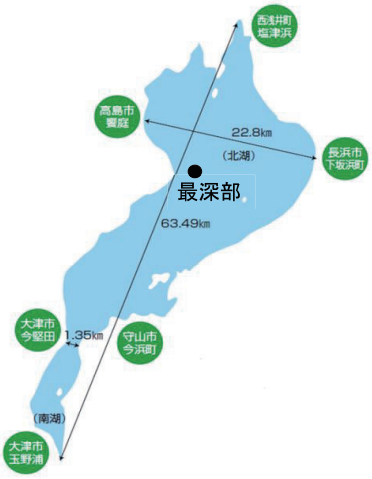
滋賀県には昔からみなさんご存知のように琵琶湖があって、同時に色々な課題がありました。そのような課題に滋賀県の人は向き合い、色々な対応をしてきた歴史があります。

今回のテーマは「マザーレイクゴールズ（MLGs）が目指す持続可能な社会」。マザーレイクゴールズとは、2年前に策定された琵琶湖版のSDGsのことです。それまでの琵琶湖に対する県民の取り組みをまとめ、県だけではなく、企業や市民や一般の人たちも一緒になって作りました。

琵琶湖ってどんなところか？　そしてどのような課題があるのか？　まずはお話をさせていただきます。

琵琶湖の概要ですが、湖としては日本一の大きさであることはみなさんご存知かと思います。淡路島よりも少し大きい。東京23区よりも大きい。琵琶湖がくびれているところに琵琶湖大橋が掛かっていて、これより北を北湖、これより南を南湖と言います。北湖と南湖を分けていますと、北湖はそれなりに深いのですが、南湖の深さは平均4メートルしかなく、水の量も非常に少ない。自然環境的にも物性が違うので、この2つは分けてものを見ることが多いです。

□ 琵琶湖の概要

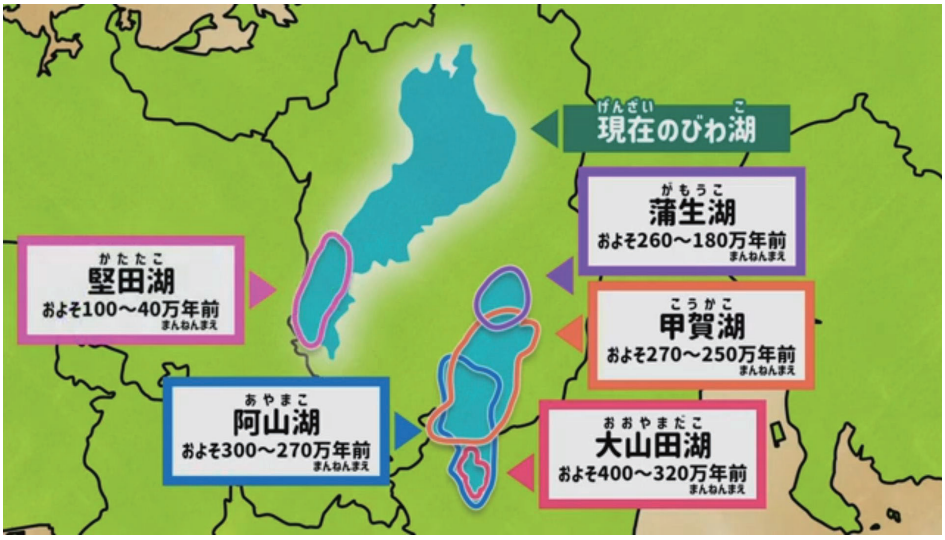


面積	669.26km2（滋賀県面積の約1/6） （北湖：617km2 / 南湖：52km2）
周囲	約235km
貯水量	約275億㎥ （北湖：約273億㎥ / 南湖：約2億㎥）
平均深度	約41 m （北湖：約43m / 南湖：約4m）
最大深度	103.58 m
幅	1.35～22.8km

「琵琶湖」という名が広く知られるようになったのは今から約320年前。それまでは近淡海、淡海、水海、湖などと呼ばれていた。名前は湖上に浮かぶ竹生島にまつられている弁才天がもつ楽器の琵琶が湖の形状に似ていることに由来する。
（参考：琵琶湖ハンドブック）

琵琶湖の特性の1つとして、かなり古くからあるということ。ずっと昔から同じ場所にあるわけではなく、昔は三重県の伊賀の方にありました。これが400万年前ぐらいと言われていて、そこから北上して、40万年前には今の南湖のあたりに移ってきた。琵琶湖は古代胡と言われています。普通、湖は1万年ぐらい経つと生物の影響や土砂などで埋まってしまうんですね。ですが、このように琵琶湖は移動したり、底の方にある断層により、埋もれずに400万年前から存在している。400万年前というと、日本列島も、瀬戸内海も、大阪湾もない時代です。さらに、南湖のあたりに移ってきた40万年前は、実は人類がまだ出てきていないんですね。人類が登場するのが20万年前。それぐらい古くからあるのが、琵琶湖なんですね。

□ 琵琶湖について



びわ湖の日40周年記念動画「びわ湖を知って！未来を創る！」から抜粋

古くからあると何が起こってくるのかというと、生物が独自に進化をして固有種が増えてきます。60種以上の固有種と1000種を超える動植物が生息しています。それだけ特殊な環境であると言えます。

琵琶湖の周りに河川が沢山ありまして、大小約450本の河川が湖に流れ込んでいます。一級河川だと117本ぐらいあります。一方で、琵琶湖から流出しているのは、瀬田川と人工の琵琶湖疏水の2本だけなんです。水がたくさんあると水源としての価値が生まれてくるわけですが、近畿地方の1450万人が琵琶湖の水を使っていると試算しています。日本の人口が1億3千万人なので、日本の人口で言えば、10人に1人が琵琶湖の水を飲んでいるという計算になります。

「琵琶湖の保全と政策について」 滋賀県庁 琵琶湖保全再生課副主幹 小林匡哉さん

□ 琵琶湖の流出入河川

大小約450本の
河川が流れ込む

流出は
<u>瀬田川</u>と
<u>人工の琵琶湖疏水</u>
のみ

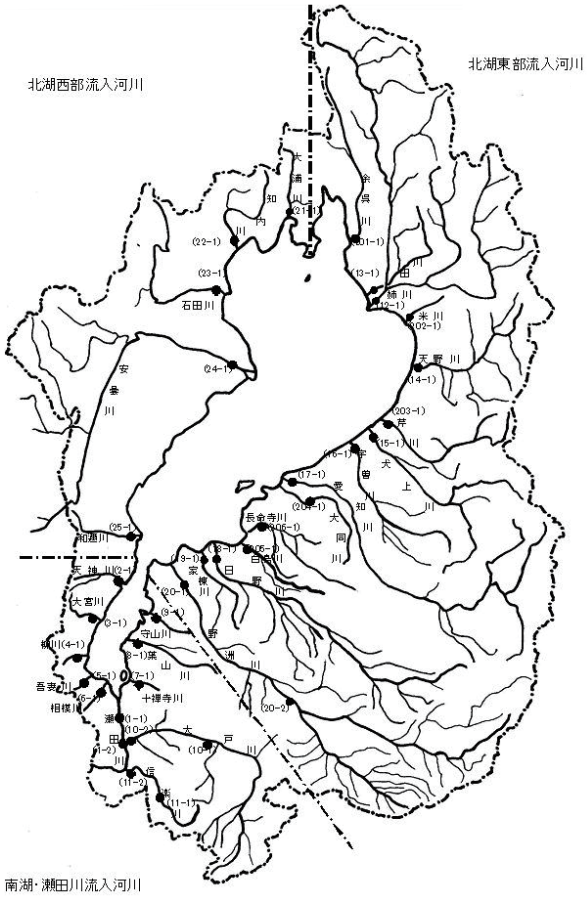


図　琵琶湖の流入河川と環境基準点

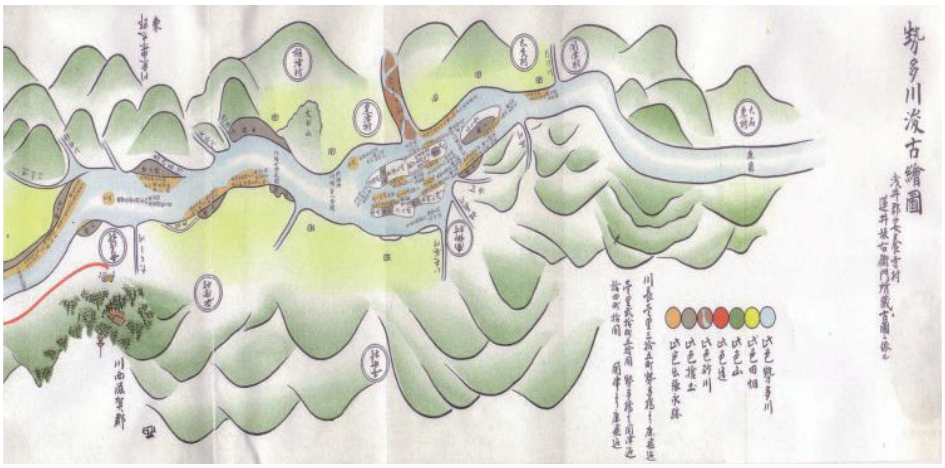
出典：琵琶湖疏水記念館ＨＰ

琵琶湖の課題に社会全体で向き合い続ける、滋賀の歴史

琵琶湖の課題ですが、まずは水害です。これは江戸時代の図ですが、左が琵琶湖、右が京都です。瀬田川は幅も狭いし水深も浅いし、全然水が流れなかった。琵琶湖をバスタブとすると、瀬田川は排水溝にあたります。その排水溝がとても狭い。雨が降ると水が流れないので、いつまで経っても洪水の水が引かないんです。当然、昔の人は浚渫して水の流れる量を多くしようと考えたようですが、京都、大阪ではその分洪水が増えてしまうという意見もあって、なかなか浚渫工事ができなかったんです。時代を経て、近年の大きな水害としては明治29年琵琶湖の大水害があります。琵琶湖の水位は＋3.76mに達して、床上浸水は35627棟、浸水日数は237日にも及びました。

□ 琵琶湖の課題

江戸時代の瀬田川浚渫



「琵琶湖治水沿革誌」（琵琶湖治水会）から

・河村瑞賢による瀬田川浚渫（1699年）の図面
・その後は、下流の反対や軍事上の理由などから、浚渫は容易には認められなかった。

さらに年月が経つと、別の課題も出てきます。淡水赤潮の問題です。当時はまだ下水道が発達していなくて、水を流すと目の前の琵琶湖に流れていく状況にありました。県民は、お風呂から出た入浴剤入りの黄緑色の排水が、そのまま琵琶湖に流れていくのを目の当たりしていたので、これは良いのかなあと思っていたら赤潮が発生した。これはえらいこっちゃと。

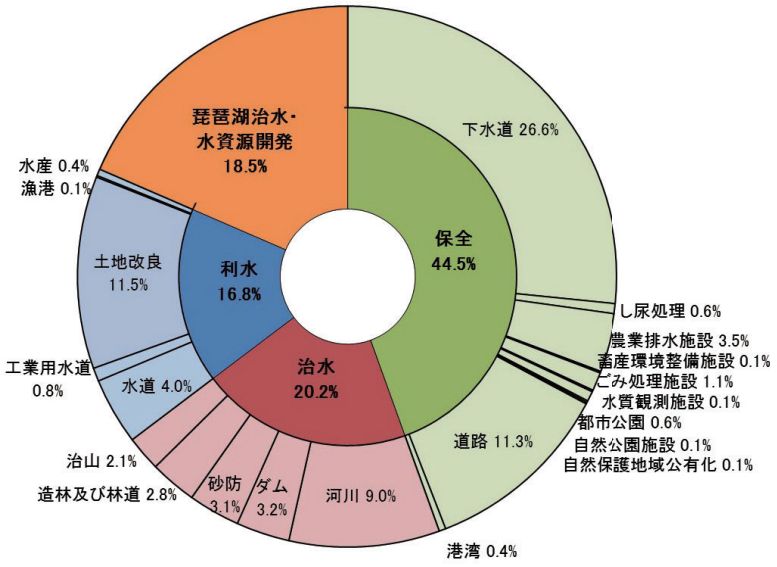
淡水赤潮である植物プランクトンが増えた原因はりんという物質。これが家庭の合成洗剤に含まれていた。だったら、りんを含んでない石けんを使おうと主婦の方々が率先して石けん運動をしてくださいました。結果、企業や行政も動き、りんが入った洗剤の販売の禁止等を条例として定めました。この条文は、今でも条例の中で生きています。

これである程度水質がよくなってきたんですが、洪水も、大体的な改革が行われています。琵琶湖総合開発事業が、国家事業として行われました。治水と利水、水質保全を事業の3本柱として進めました。水質に関わる大きな点としては下水道の普及です。下水道は1970年代淡水赤潮が出た時は、このグラフの左の頃です。ほとんど普及していなかったのが、琵琶湖総合開発事業で普及しました。下水を下水道や浄化槽などで処理をしている人口が多いのは、東京都に次いで滋賀県となっています。

□　琵琶湖総合開発事業(1972年～1997年)

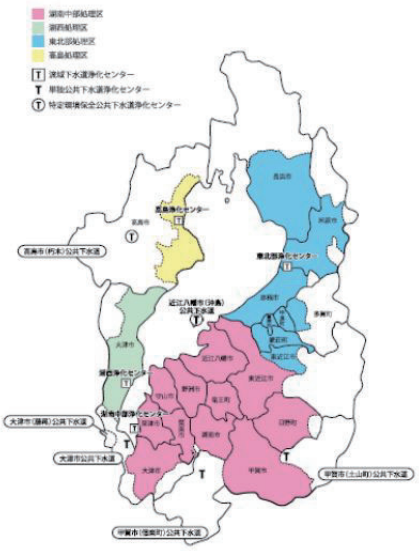
「琵琶湖総合開発特別措置法」(平成9年3月31日失効)に基づく事業の展開

〈総事業費約１兆9,055億円〉



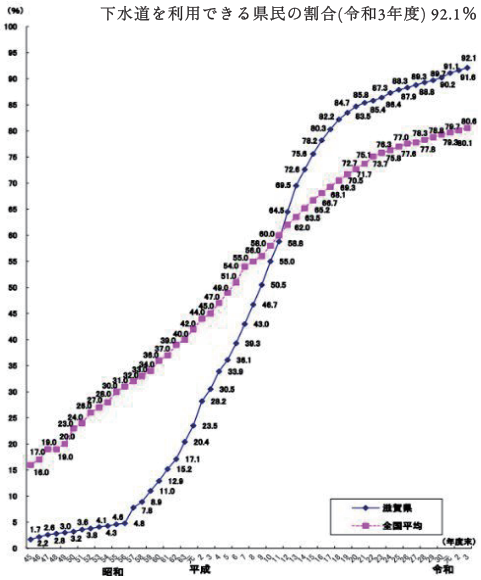
琵琶湖総合開発事業費の内訳(「琵琶湖の総合的な保全の推進」琵琶湖総合保全連絡調整会議　2003年)

□　下水道の普及



滋賀県琵琶湖流域下水区域図(令和３年度末現在)

下水道を利用できる県民の割合(令和3年度) 92.1%



下水道処理人口普及率の推移

その結果、琵琶湖の水質がどうなったか。透明度では、北湖は5.8メートル下まで見えます。南湖は、平均水深が4メートルの所、2.2メートル下まで見えます。水質は良くなってきましたが、一方で、水は良くなったんだけども、魚が全然獲れないままなんです。原因は気候変動、排水、護岸工事など色々考えられます。人の生活をよくしようとするためにやった行いが、魚が獲れにくくなった状況に繋がっていて、非常に複雑な問題となっている。このことに限らず、他の問題でも非常に複雑になってしまっているというのが今の課題です。

それには理由があって、地理的な状況として、滋賀県は周りを山に囲まれていて、降った雨は真ん中の琵琶湖に集まってくる。そうすると、どうしても私たちの滋賀県民の生活、営み、社会のあり方が、さまざまな環境に作用し琵琶湖の問題として立ち現れてくる。現代では、大変複雑な問題になってきています。

琵琶湖版SDGs「マザーレイクゴールズ」は、民官協働によりつくられたしくみ

複雑な琵琶湖の状況の改善に向けて考えられたのが、マザーレイクゴールズです。複雑な琵琶湖の状況には、たくさんのアプローチで改善していこう、ということです。

マザーレイクゴールズには13個のゴールがあります。
ゴール1：清らかさを感じる水に
（水質に関するゴール）
ゴール2：豊かな魚介類を取り戻そう
（琵琶湖の魚介を増やし、人々が湖魚料理を楽しむ）
ゴール3：多様な生き物を守ろう
（生物多様性の保全）
ゴール4：水辺も湖底も美しく
（景観やポイ捨てゴミの問題）
ゴール5：恵み豊かな水源の森を守ろう
（森林保全、森は滋賀県の２分の１、琵琶湖は６分の１）
ゴール6：森川里湖海のつながりを健全に
（一つのところで問題を解決しても別の場所で齟齬が起きて別の問題が起きる、森川里湖海は繋がっていることをしっかり頭に入れておく）
ゴール7：琵琶湖のためにも温室効果ガスの排出を減らそう
（琵琶湖も地球温暖化の影響を受けている）
ゴール8：気候変動や自然災害に強い暮らしに
（ハード対策は自然に大きな影響を与える、人命と環境保護のバランスを踏まえつつ、ソフト対策の導入を）
ゴール9：生業・産業に地域の資源をいかそう
（環境にやさしいもの、地元のものを使う）

ゴール10：地元も流域も学びの場に
（地元を知ってもらい、琵琶湖にも興味を持ってもらう、目の前の溝は琵琶湖につながっているという話を学校でしている）
ゴール11：琵琶湖を楽しみ愛する人を増やそう
（自分が大事にしているものは丁寧に扱う、琵琶湖もそれと同じ）
ゴール12：水と繋がる祈りと暮らしを次世代に
（文化、温故知新、昔の考え方を見直し、次世代につなげていく）
ゴール13：繋がりあって目標を達成しよう
（色々な年代、色々な人がいるが、一緒にゴールを達成していく）

□ マザーレイクゴールズ（MLGs）とは

（マザーレイクゴールズ公式サイト：https://mlgs.shiga.jp/）

ゴール1～6は琵琶湖流域の自然環境に関するゴール、ゴール7～12は、琵琶湖を取り巻く暮らしに関するゴール、ゴール13は全体を貫くゴール。琵琶湖を持続可能なものにしていくには、自然環境だけにアプローチすればいいわけではないということです。

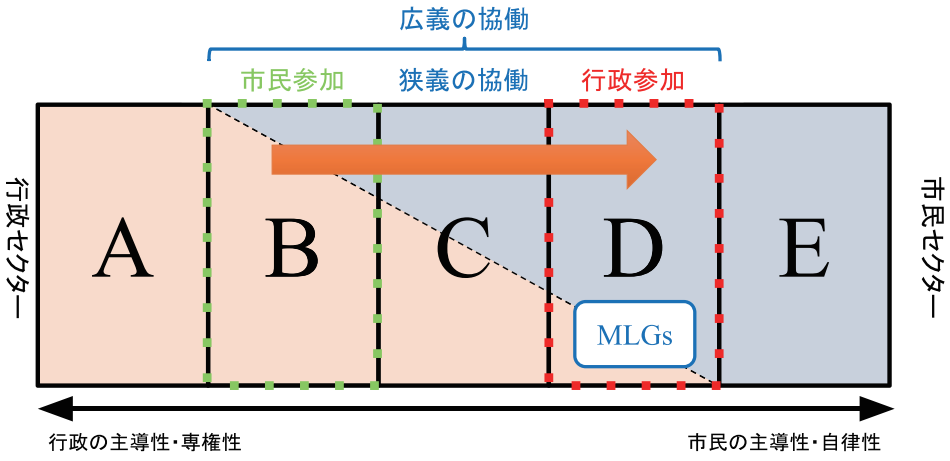
そもそも、マザーレイクゴールズがどうやって出来たか？ 前身になるものがありました。それが、マザーレイク・フォーラムという集まりです。およそ十年間、琵琶湖に関わる活動をしている方に集まってもらって、自分たちの活動を発表し、情報共有する会がありました。その会で参加者に、こういう行動をすれば琵琶湖が良くなる、という「琵琶湖との約束」を自分で考えて、宣言してもらっていました。これを10年分、データベース化していたんですね。これらのデータベースを抽出分析して、何が大事なのかまとめていったのが、先ほどの13のゴールになります。

マザーレイクゴールズが目指しているのは、「活動の生態系」です。この図の植物が、それぞれの活動を表しています。企業の活動、個人の活動などが、時には他の人に支えられて、その活動が伸びていく、その伸びていく先にあるのがマザーレイクゴールズです。こういったものを目指しています。資金は水です。活動を進めていく上でも大事なので、資金もしっかり回さないといけない、と考えています。

推進委員会には、有識者や企業の人が集まってやっている委員会、行政による事務局、学術フォーラムはマザーレイクゴールズの進捗管理をしていただいている有識者の方々です。そのほかに広報大使、分野別大使という色々な発信をしてもらっている人たちがいます。大きな丸が賛同者、MLGsな活動をしてくださっている人たちです。その他にMLGs案内人という、賛同者の活動に伴走したり、お手伝いしたりする人たちもいます。このような体制でマザーレイクゴールズを進めています。

こちらの図版は、協働について説明したものです。行政だけで琵琶湖を良くしていくことは出来ないと考えていて、色々な方々の取組をもっと盛り上げていきたい。マザーレイクフォーラムを含め、これまでの取組はいわゆる官民協働。官の取組に市民さんが入る、という仕組みになってしまっていた。我々は、もっと民官協働という民が先に立つような仕組みを作りたかった。そういうこともあり、マザーレイクゴールズはあまり決めすぎない仕組みにしたという経緯があります。

□ MLGsの“協働の範囲”



A：行政が執行者として責任をもって行う領域
B：行政が主導し、市民に委嘱する市民参加方式による領域
C：行政と市民が協働で立案・実行する領域
D：市民が主導し、行政が積極的な支援をする領域
E：市民が主体的かつ自立的に活動する領域

出典：世古一穂「参加のデザインを学ぼう」TRCブックレット3（2012）に加筆

マザーレイクゴールズは、いろんな企業とコラボしたり活用してもらったりしています。また全国の学校などから依頼講演をいただいています。教育旅行など、ツーリズム学習ということで、観光振興という効果も出てきています。それからマザーレイクゴールズ体操を作りました。そうすると健康のイベントやスポーツのイベントなどに呼んでいただけるんですね。環境啓発は環境に興味がある人以外にはなかなか響かないんですが、この体操のおかげで幅広い層にPRすることができるようになりました。

社会的共通資本としての水（後編）

2日間に渡り実施した「都市と水」リサーチツアーの共同設計者である京都府立大学大学院生命環境科学研究科准教授 松田法子さんと共に振り返り、さらに宇沢国際学館代表取締役 占部まりさん、滋賀県庁 琵琶湖保全再生課 滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖保全再生課 副主幹 小林匡哉さんによるキーノートスピーチを踏まえ、パネルディスカッションを行った。モデレーターは株式会社ロフトワーク アートディレクター 小川敦子が担当した。

Discussion theme

眼には見えない“つながり”を心の眼で想像すること。想像力がその橋渡しとなる。

小川：ここからは『社会的共通資本と自然環境』というテーマでディスカッションを始めたいと思います。占部さんにお話いただいた社会的共通資本が提唱する3つの制度資本のうち“自然環境”について、これからどのように“コモンズ＝共有の財産”として捉えていくことができるのか議論を進めていきたいと思います。議論の前提として、今回2日間に渡って行った「都市と水」フィールドワーク・リサーチツアーの企画をしてくださった松田先生にその背景にあるお考えについて是非伺わせてください。

松田：先ほどのキーノートスピーチの中で占部さんが「想像力」ということを仰っていましたが、すごく共感しました。例えば、Googleマップというツールの出現によって、私たちは初めての場所を訪れるときでも“鳥瞰的な感覚”を持つことが可能になりました。自分の眼で琵琶湖の全体像を眺めることはできないけれども、湖をあるまとまった形として想像することはできる。けれども、そうした俯瞰的で視覚的な認識の一方で、自分が今ここを過ごしている、その日々の生活が、一体どのぐらいの地理空間の広がりや時間の長さ、あるいは物質循環と連続しているのか、ということを、生活感覚としてどのぐらい間近に捉えられるかが大事だと思うんですね。そのことを今回は、「水」を通して考えてみる、接近してみると、分かりやすいのではないかと思ったわけです。

人間と自然を別々に捉えない、ということが大事だと思います。自然（しぜん）は“じねん”。「ただあるがままの存在」です。私たちも“じねん”の一部として、そのネットワークの構成者である。そう捉えるべきだと思います。そして生物学者の福岡伸一さんもおっしゃるように、私たちは、物質的には何ヶ月か経ったら中身が全部入れ替わっているような存在でもあります。身体の内部と外部とで循環を繰り返している。その一方で、皮膚が自分という存在を囲いとっていることで、個体としての生命を維持している。体は何とつながり、かつ、隔たっているのか？ それを意識すると、生活感覚は結構更新されるのではないかと思います。体がつながりながら隔たっているものは、環境です。その環境のどこまでを自分ごととして捉えて日常生活を送るのか。そういうところに感覚を開いていく“橋渡し”をしたいという思いが、今回の「京都と水」ツアー企画の根底にあります。

例えば水道の蛇口をひねれば水が出る。上水道は近代に整備されてきた大変重要なインフラなんですけれども、そういった均質で平等なインフラストラクチャーの大切さと同時に、足もとの“見えない水”とその循環の個性と大地的な根本性にも注目したい。そのような視点

を具体的には今回のツアーの構成に反映しています。

小川：ありがとうございます。今仰っていただいたように、地表化していない眼に見えない部分も“観る”ことをこの2日間に渡って参加者全員でトライしてきたと捉えています。

日常で目に触れる体験が、
社会における共通の価値・価値観を生み出していく。

小川：琵琶湖という地表化しているものに対し、いかにしてコモンズとして維持していくのか？　という話でもあったと思います。色々なものの考え方をされる方がいて社会には多様な価値観がありますが、それらを前提としながらビジョンの形成という概念形成を市民の方々と共に行うことは非常に難易度が高いものだと思います。改めて、どうやって対話をしていくことが重要なのか？　この辺りについて、いかがでしょう？

小林：一つには、先ほどもお話した「琵琶湖をとにかく楽しんでみよう」ということかなと思います。地下を流れている水は見えないという松田先生のお話もあったのですが、近い観点ですと公園の中で入浴材を入れた水が自分の目の前で琵琶湖に流れていくというお話をさせてもらいました。下水道を整備されたら、それって見えなくなるんですね。そうすると環境に対する意識が下がってきたというか、いわゆる川で遊ぶ子供たちも減ってきた。目の前の水路が大きかったりするので魚も遡上してきたりしていたのですが、それに蓋をされてしまうと触れる機会が減ってしまう。ひと世代前の方々はどうしようかとなっておられて、しきりに子供たちと川に入って遊んだり一緒に生物の調査をするといったような歴史が滋賀県ではありました。

そういうふうに「目に触れる体験する」ということがとても大事だなと思っていて、それがわからないと行動の意味が腹落ちしないと言いますか。「地下水大事だよね」ということであれば、おそらくどこかで利用がされていると思うんですね。

大事だということは、それだけ生物に対して人に対して恩恵を与えているから大事だということがあると思っていて。その現場をどのような形であれ、見る、体験するということが、まず一つのきっかけなのかなと思いますね。

小川：先ほどのキーノートスピーチでは色々な企業とのタイアップをやっているというお話がありました。行政の考え方に賛同されている企業の方々が多いのだなと。企業を巻き込んでいくプロセスにおいて企業のメリットや経済的価値について提示をしなければ実働にはなかなかつながりにくいのではないかと思うのですが。

小林：僕は生まれは大阪で、環境の勉強がしたくて滋賀県に来たんですね。滋賀県の人って、すごく環境意識が高くて。大阪にいた時は水の流れも溝も、たまにタバコを入れられるような“ゴミ箱”のようなイメージと言いますか、暮らしている中ではそういう感覚だったんですよね。でも、滋賀県の人はゴミ拾いをしますよと言うと、みんな出てきてゴミ拾いもするし溝も掃除するし。なぜかと言うと、水路が汚れていたら水害が発生する、琵琶湖に流れていくとかそういうことを身近に分かっておられると僕は解釈をしています。

滋賀県にそのような風土があるということを企業の方も気づいておられて、環境を守るとはこういうことなのだと学ばれたのではないかと。そうすると、できることはないかな？ とか、魚釣りをしてみようかな？ とか、考えが徐々に移って行かれているのではないかなと思います。そういったマインドの中で我々が環境保全などの講演をしにいったり経済団体さんのところへお話をしにいったりして、一緒に何かをやりましょうという流れになることが多いですね。あまりこちら側から何をしましょうかという営業をしたことがないですね。

さらに実際にやってみたら楽しいということがあるのだと思います。汚れた浜辺があるとしてゴミ拾いをして、そこが綺麗になっていく様を見ることで楽しいなという気持ちになりますよね。取り組みやすいことからやってみようかという動きになっていくのだと思います。

京都市総合企画局都市経営戦略監 西田良規さん（以下、西田）：琵琶湖って信仰の対象となったことはないのですかね？

小林：ありますよね。水路としての琵琶湖の無事を祈る社があったり、祈りというものが土地にたくさんありますよね。

西田：「マザーレイク」という言葉が数年前からワードとしてあり、それがめちゃくちゃしっくり来ています。なんとなく“母なる”というイメージに合うというか、そういう共感性があって。

小川：さらに、何年もかけて市民の方々と一体となってインパクト指標として13項目を作っていったというプロセスそのものが、いいなあと思いました。

西田：「水瓶」の存在といろんな営みについて日常の中で意識する機会は通常はないけども、滋賀県の人たちはある。そこが素晴らしいですよね。

文化資本から社会、経済を捉え直すことは自分たちの“足もと”とつながっていく「回路を豊富化していく」ことである。

小川：文化資本という観点から、社会や経済を捉え直すことについての重要性について、もう少し詳しく話を進めていきたいと思います。Round Table Discussion_1「都市と、創造性の循環」で議論を進めていったときに、本来は産業は文化であって人々の営みなので、文化と経済は本来分裂をして考えていくものではないのではないかと渋澤健さんに仰っていただいたことがとても印象に残っていて。豊かさそのものがこれからどのように変わってくると思われますか？

松田：今回のツアーの主旨もある種そうなのですが、自分たちの“足もと”と深くつながるための「回路を豊富化していく」ということが、すごく大事になってくると思っています。解像度の細やかさと同時に、マクロな時空間を認知する感覚をより育てていくことが生活を変える可能性がある、希望としてそういう風に考えていきたいと、私はそう思っているんですね。

日本の都市史研究が影響を受けた歴史の捉え方の一つに、フランスのアナール学派があるのですが、その学派の代表的な1人にフェルナン・ブローデルという歴史家がいます。歴史学の分野から資本主義をかなり本格的に分析した人でもあります。

フェルナン・ブローデルが提示した重要な概念の一つは、歴史の「短波、中波、長波」というものです。歴史は、短波に位置づけられるいわゆる出来事史、ある程度の定常状態を含む中波、そしてより長期的な長波の歴史の３層で成り立っている、としました。その中でもブローデルは、定常状態の歴史、日常の歴史をどう描くかということを重要視したんですね。

つまり、年表に載ってくるような、華々しく画期的な出来事史ではなく、定常状態をどのように描くか。そこに、本当の歴史の構造があると。

ただそこに、もう一つ私が重ねて言いたいのは、今までの歴史学からはほとんど抜け落ちていたものがある。それが地球との関係なんですね。人間の歴史ですから、地表から上の話しかしてこなかった。

人間は、変わり続ける動的な地球の上に生活環境を構築してきた。

松田：マルクスが生産様式、柄谷行人が交換様式という「様式」で世界史の構造を大きく捉えようとした視点に呼応しつつ、これまでの歴史学では積極的に含み込まれていなかった「地球は動いている」こと、地球が常にプレートテクトニクスなどによって自己構築を続けていることと人間の生活環境との関係を、「構築様式」という観点から捉える「生環境構築史」という共同研究に、仲間たちと共にトライアルしています。

17世紀後期イタリアの宣教師で科学者のキルヒャーは、地球の内部構造に着目してそれを解明しようとした初期の人物の一人ですが、当時ナポリで起こった噴火を実際に目の当たりにして、地球の中身を考えていこうとしました。噴火や地震は地球にとっては自然の活動だけれども、私たちの生活はとんでもないインパクトを受けてしまうということが多々あります。またそれは、近年、想定外の災害、という形で増幅されているように感じられます。しかし地球のイベントはこれからも絶えず続く。その科学的事実を前提にすれば、我々の生活と地球の活動結果がなぜコンフリクトを起こすのかという理由の方を考えた方がいいのではないか。生環境構築史はそういう視点転換を含んでいます。地球は生きている。だから、それでは私たちはその上にどのような構築様式をもってこれから住んでいくことが望ましいのかということを、歴史を振り返りながら探っているわけです。

歴史段階としては、近代に人間が地球からより多くの資源とエネルギーを取り出すようになり、そしてそれらを元に人間の生環境を最大限に広げる志向性をもってきたことが、地球の自律的な動きとの間に不具合を起こしているのではないかと考えました。そして資源を取り尽くし、汚染された地球が住みづらくなれば、月や火星を開発してそちらに移住すればよいではないかという、科学を取り込んだ資本主義が描く未来像も否定できないように思います。けれども、地球環境がより悪くなっていく過程でも、わたしたちは地球で生きていかなければならない。ではそこで、どんな生環境をつくりうるのか。

グローバル・コモンズ＝地球でどう暮らすかを考える。「豊かさ」を再検討するための視角とは。

松田：その大切な策の一つに、資本主義の側に明け渡してはいけないもののガバナンスと、地球という極めて大きな環境を分節的に捉えながら資源の再分配と循環を考えるということがあると思います。ところでこの頃、地球そのものがグローバル・コモンズというひとつのコモンズだと認識されてきていますが、これほど大きなコモンズは、現実的には、国連のような国際機関があっても、Nation（国）同士の対立によって、いま現在もそのガバナンスがうまくいっているわけではないですよね。

従来のコモンズは、地域に即した比較的小さな共同体の、基本的には利用度の低い共有地のことであって、共同体の再生産のための小規模な場所だった。地球温暖化対策のように、地球が一つのグローバル・コモンズとして捉えられ、それに関わる人、社会、文化が極めて多様になったのは歴史上初めてのことです。この巨大なコモンズをどうしていけばいいのかということは、非常に難しい話ではありますが、それでも、大気や水のように、いまここと切れ目なく繋がっているものは、何とか自分ごととして捉えられるかもしれない。とはいえ身体感覚はなかなか地球スケールに追いつかないので、対応できる範囲を分節的に設定する必要があると思うんですね。その単位をどんなふうに設定していくかは重要なことだと思います。それは、二酸化炭素の国ごとの排出権設定などのように、Nation単位で考えることが本当にふさわしいのかどうか。今回のツアーでは水を扱いましたが、例えば「流域」などは、伝統的なコ

モンズよりは大きく、Nationよりは小さいかあるいはNationを横断し、かつ地球の各部の形や環境に即したコモンズの一例になるのではないか。

初めのご質問にあった「豊かさそのものがこれからどのように変わってくるか？」ということについてですが、それは既に物質的豊かさだけではない時代に入っていることを前提にした上で、豊かさを考えていくときの希望のもち方、仕組みの考え方が色々とあるなかで、各々をどのように繋いでいくのかが、これからやるべきことではないかと思っています。その結合の仕方を空間的に考えるために、足もとの具体的な地域を読み見直すということは、方法としては大いにあるのではないかと思います。

占部：非常に面白い視点ですね。キリスト教は一神教ですので、神から与えられた資源をいかに最大化できるか神以外の関係性に対しては何をしても良いという発想が生まれがちですが、資本主義はそこから生まれてきているわけです。そこに上書きをしているだけでは、良い社会、地球をコモンズとして考えられるような社会は生まれにくい。

松田：今の資本主義経済の仕組みは決して当たり前というものではなく、西洋初期近代という、極めて限られた時代と地理空間の中で誕生したものです。長い人類史の中でこの数世紀に急成長した経済システムであって、経済の形はそれしかないというわけではない。それが、地球全体をほぼ覆う巨大なシステムになった、ということを学んでおいた方がいいと思います。では、拡大する資本主義経済に対するオルタナティブな経済や社会のあり方にはどんな可能性があるのか？ そういうことを深く考えていかないとならないと思うわけです。世界経済の覇権を先駆けて狙った国々から広まったといえる世界史認識を捉え直した上で再出発しなければならないし、違う観点から考える必要があります。

資本主義の摂理で土地を捉えることから脱却していくためには、場所や土地という文化に即して価値を捉え直すことが「鍵」となる。

松田：これからは、具体的な場所、土地に即して考えることが非常に重要になってくると思います。“足もと”というその土地が、都度大事であるわけです。だからこそ、皆さんには「湧水」や井戸を見ていただきたかったですし、水の循環に関連して、京都の地下構造がどうなっているのかを知っていただきたかった。

例えば、東京には京都とは全く違う大地特性があります。今お見せしているのは、二年前に湧水だけを辿って東京を歩いた時の地図なのですが、白い丸印のところが、今も残っている湧水地点です。例えば、目黒という地名は目黒不動尊からきていますが、これは湧水地を霊場としてつくられた寺院です。また、東京の複雑な坂の地形は、水が台地を削ってできたものなんです。東京都内には、報告されているものだけでも約600地点の湧水地が存在しています。かつてそれらは、もっともっといっぱいあったのですよね。この時は5日間続けて歩いたのですが、台地と低地のキワである崖線沿いと、台地に入り組んだ坂道の奥にあたる谷頭を中心に、色々な湧水の形態を確認できました。こうした崖線や谷頭の湧水というのは、京都では東山の裾野などに一部ありますが、盆地内の平地では起こり得ない水の風景や場の作られ方を生んでいることを感じました。かつての江戸東京にはあちこちに名水の井戸もあったし、関東大震災の時に人々を救った湧水が今も麻布十番通りのすぐ横にひっそりと存在していたり、大井のほうでは私有地だけれども開放して農作物の洗い場とされていた水が、その薬効から信仰も集めて残されたり。

人の住み方も、太古の東京の大地では湧水に即したものでした。旧石器時代や縄文時代の遺跡は、見事に湧水地の真上に一致しています。なお人は、低地にはほとんど住みませんでした。なぜなら低地では川が氾濫を起こしたりするからです。東京の原初的な住み方は、湧水のある崖線の台地上か、台地に入り組んだ小さな谷の縁です。そこに、蟻の行列のように、低地・台地・湧水という大地の節理にそって居住が展開されていたことが分かります。

では現代の東京の住み方や、土地の価値とはどんなふうに決まっているでしょうか。例えば今、東京駅周辺の丸の内あたりは平米あたりの最近の地価公示価格が5770万円程にもなります。これに対して、多摩の方では8万円ぐらい。同じ1メートル四方の土地なのに、資本主義経済の中で大幅な価値の差が付けられている。そして、このような違いの要因の一つに、鉄道路線というものが強烈に働いていることが指摘できます。

鉄道や地価の構造に乗っ取ったものではなく、大地の節理に乗っ取って都市の中に力強い生命力がある場を再発見していき、人間同士、あるいは、人間と異種、つまり、鳥獣草木や土や水と共に、新しいコミュニティを都市の暮らしとして取り戻していく。湧水地にそんな共有地ができないだろうかということを夢想しています。

占部：本質的な多様性のよさというのは、異種ということの組み合わせでもありますよね。そこに価値があるなと思いますね。

小川：人間と自然、社会、経済を区切らずに、一つのつながりとして考えていくこと、発想の転換そのものが、次の時代の豊かさを生み出していくことになるのだと感じました。先生方、大変ありがとうございました。

土地の記憶を辿りながら歩く。
そして、共に言葉を交わすことで、次の道が見えてくる。

小川：では、この2日間非常に濃密だったと思うのですが、どのような発見があったのか、学生の方々に是非伺ってみたいと思います。

学生さん（1）：京都に住んでいる人たちは99％琵琶湖からの水に頼っている。一方で、足元で井戸を掘り、そこで水を汲み上げることをやっていくだけでも水道だけに頼らない生きている可能性のようなものを考えることができるのではないかと考えていました。

学生さん（2）：スケールが大きい話を普段の生活に落とし込むのが難しいと感じていたのですが、日本だけではなく世界と連携を取りながら色々な考え方を持っている人たちと多様に考えていくことが重要であると感じました。

学生さん（3）：このような経験をするのは初めてでした。ひたすら情報に殴られていて（笑）。今まで、なんとなくふわふわとしてしか掴めていなかった街の実態が、京都水盆の話とかそういういろんな方向から見ることができて。いっぱい勉強していきたいなと思いました。

学生さん（4）：ツアーの一番初めにお話を伺った牧野さんの表情がとてもよくて印象的でした。梨木神社のスケール感、小さい範囲でアクションがあるようなものが点と点が繋がっていくように拡がっていくと、例えば水などの共通として大切にしていきたいものが活用されて後世に遺していけるような動きになるんではないかと、そういうふうに考えています。

学生さん（5）：楠見先生から京都水盆の話を聞いた際に、文化も地下水から維持されてきたという話もあり、水が京都らしさの一つになっているのかなと。梨木神社では水を売りにしたコーヒーを販売して、その収益から神社の修復に使う循環が生まれていて。京都らしさを培っている水をどのようにして扱っていけばいいのか。梨木神社の井戸も大事にしている人たちがいるから、水は大事なものだと意識できる。だからこそ、あまり価値が見出されていないものが価値あるものとして認識されるようになっていくことが大事になると思ったので、自分でも色々な活動に参加していきたいと思いました。

学生さん（6）：これまで色々なところを歩いたり話を聞いたりして、京都で一人暮らしをしているのですが。京都のこと、この都市のことを知らないことばっかりだったと感じていています。自分も建築を勉強していて、実際に敷地調査をしたりもするのですが調査というものが何に活きているのかがわからず。自分が住んでいる場所を感じること自体も難しかったのが、今

回、土地という足もとをみていくことが大事なのだと。人と自然とのコミュニティを形成していくことが今後建築としても求められていくことなのだろうということが感じられました。

小川：学生の方々、ありがとうございました。今のみなさんのお話を聞いて、占部さん、松田先生、いかがでしたか？

占部：学生さんの視点が非常に面白い。今回の一番の泉かもしれないと思いました。緻密な臨場感、高い倫理性というのが“足もと”ということだと思うんですね。理想は実現しないから理想と言われているのですが、理想があるからこそ現実との差分がわかると思うんですね。自分が行きたい方向性との間にあることが。それは、動いてみてわかること、見えてくることがあると思うんです。だから、何か動いてみる、そこに社会的意義が明確に見えなくてもとにかくやってみること、考えてみることだけでもいいのではないかなと、思いました。

人間には特殊な脳の特性があって、声が大きな人に付いていきたくなったりとか、論理的な意見は聞きたくない、だけど論理的な思考をしていて抽象度を上げて哲学や命とかを考えていくと、なぜか快楽ホルモンが出てくるという不思議なものなんです。

世界平和という大きな目標のために私自身は活動をしているわけですが、人間の特性を考えると叩き返す方が力が強くなる。オキシトシンで仲間になるほど外側に攻撃性が高まってしまう。そういうのをみていると平和って来ないのではないかなと思うんです。資本主義では富が集中して格差が出ていて、世界の富の半分を持っているのが世界のうちの七人とされています。しかし、その中の一人だったら説得できるかもしれないという望みがある。ポリオワクチンをWHOが広めようとしていましたがなかなかすすまなかった。でも、ビルゲイツがお金を出したらほんの数年でワクチンが出るようになった。「希望」といったところに活路が見えてくるのではないか、そういうことをヒシヒシと感じた時間でした。

松田：土地は全てを記憶している、全ての蔵のようなもので、全てを語ってくれる。それを読み解く能力をどう上げていくことができるのかが大事だと思っているのですが、そんな土地を縫うように体験していけることが「歩く」ことだと思うんですね。色々な専門分野の人たちと「歩く」。同じものを見て、言葉を交わす。そのような意味でこのツアーを企画できたことはよかったと思います。色々な方にご参加いただき、また、素晴らしい講師のみなさんにもご参加いただきました。これからも続けていけると良いですよね。「土地を歩く」ことで学びを深め、足もとからより多くのことをつなぐ回路を豊富化する。そんな経験を続けられると良いと思いました。ありがとうございました。

京都府立大学大学院生命環境科学研究科准教授
松田法子（まつだ・のりこ）
1978年生まれ。建築史・都市史。住まい・集落・まち・都市における、人と大地の関係に関心をもつ。近年は「領域史」や「都市と大地」、「汀の人文史」というテーマに基づくフィールドワークや、ヒトによる生存環境構築の長期的歴史とそのモードを探る「生環境構築史」に取り組む。単著に『絵はがきの別府』、共編著に『危機と都市』、『熱海温泉誌』、『東京水辺散歩』、共著に『変容する都市のゆくえ――複眼の都市論』、『渋谷の秘密』、『世界建築史15講』、『戦後空間史――都市・建築・人間』など。京都市環境影響評価審査会委員もつとめる。

宇沢国際学館 代表取締役
占部まり
内科医、宇沢国際学館取締役。1965年、シカゴにて宇沢弘文の長女として生まれる。東京慈恵医科大卒。現在は地域医療に従事するかたわら、宇沢の「社会的共通資本」をより多くの人に知ってもらうための活動を行う。2022年京都大学人と社会の未来研究院にて、社会的共通資本と未来寄附研究部門発起人。

滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖保全再生課　副主幹
小林　匡哉
2007年に環境行政職として入庁。これまで環境学習や琵琶湖を活用した観光事業、琵琶湖版のSDGsであるマザーレイクゴールズ（MLGs）の推進などに従事。

ロフトワーク京都 アートディレクター
小川敦子
1978年生まれ。百貨店勤務を経て、生活雑貨メーカーにて企画・広報業務に従事。総合不動産会社にて広報部門の立ち上げに参画。デザインと経営を結びつける総合ディレクションを行う。その後、フリーランスのアートディレクターとして、医療機関など様々な事業領域のブランディングディレクションを手掛ける。そこにしかない世界観をクライアントと共に創り出し、女性目線で調和させることをモットーにしている。2020年ロフトワーク入社。主に、SX（サステナビリティ・トランスフォーメーション）を軸としたコーポレートブランディングを得意領域とし、2021年より経産省中部経済産業局、大垣共立銀行が中心となりスタートした、東海圏における循環経済・循環社会を描く「東海サーキュラープロジェクト」のプロジェクトマネージャーを担当。

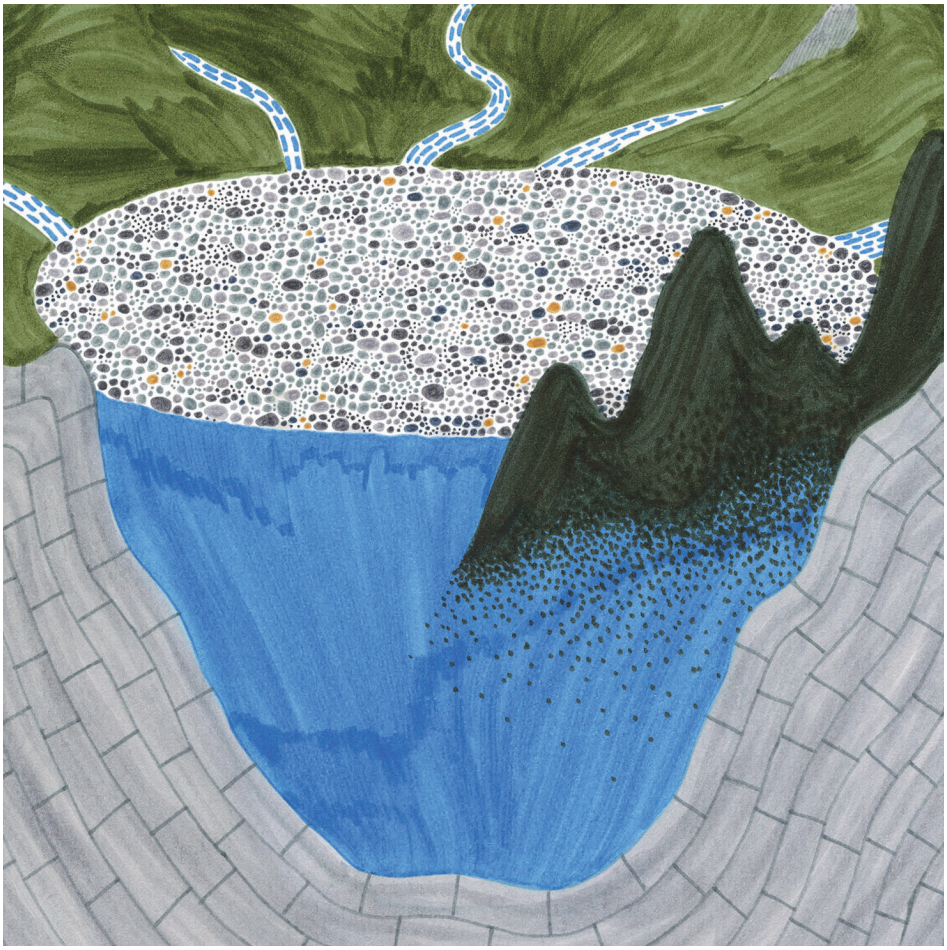
Essay

Water Calling

― 京都を流れる水の音が聞こえますか？

キュレーター / プロデューサー
永井佳子

4月のことだった。もう春だというのに凍えていた。この寒さ、湿り気はどこから来るのだろう。そう思いながら身を縮めていると京都に住んでいる友人が何気ない表情で言った。「だって京都の地下には大量の水が流れているのだから」
そのことを聞いたとき、急に足がすくわれるような感覚に襲われた。私は今、水の上に立っている。二本の手を合わせて掬っても、すぐにそこからこぼれ落ちていく水。目に見えないけれど、私たちの身体のほとんどを構成し、命を左右する水。その上で私は生活している。



「Water Calling」京都水盆 作画：イザベル・ダエロン

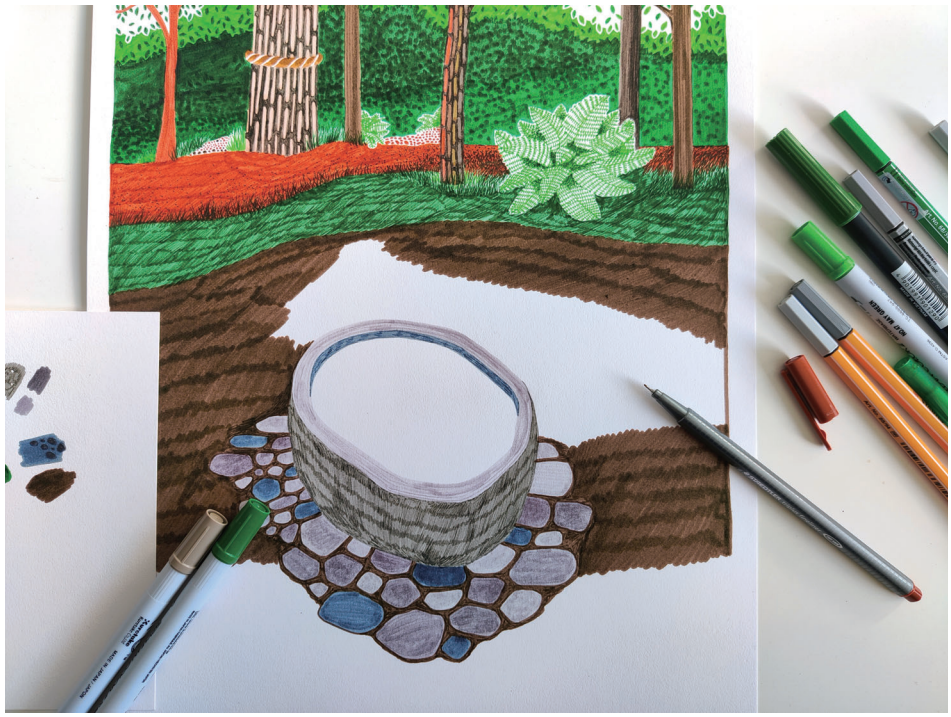
見えないものを描く

この見えない地下世界を描くことができないだろうか。そんな問いとともにすぐに思い浮かんだのがイザベル・ダエロンである。ダエロンはパリを拠点に活動するデザイナーで、水をはじめ、太陽や風などの自然エネルギーの循環とともに人間が生きる方法を追求しつつ、フランス各地で公共空間の設備のデザインを行い、その土地の環境や文化を映し出すようなパブリックアートを制作している。ダエロンとは数年にわたり、デザイナーとディレクターという立場で、様々なプロジェクトを協働してきた旧知の仲だった。彼女のデザインの独自性は実装をするまえに、提案するデザインがもたらすであろう世界観と、与えられた環境の関係を抽象的かつ遊び心あふれるカラフルなドローイングにするところにある。それは、絵本の1ページのような不思議な空気感に満ちている。それもそのはず、水、太陽、光といった自然エネルギーは色形がなく、人間の目に見えづらい。そうした宙をつかむようなエネルギーの姿を描くことで、見る人の想像力を刺激し、いかにして人間が自然の循環のなかで生きることができるかを気付くきっかけを作っている。

それから私は京都の地下水について必要な知識や情報を得ようと、市内の図書館や資料館、博物館に通って地質や地形、歴史に関する資料にできるだけ当たった。そのなかでも、このプロジェクトの骨子を作る大きなインスピレーションとなったのは関西大学環境都市工学部の楠見晴重さんによる京都盆地の地質構造の研究であった 脚注。「京都水盆」と命名された地下構造を示すデータと図によると、京都の地下深くにはお椀状の岩盤でできた層があり、その上に積もるようにできた砂と石から成る層の中を水がじわじわと流れている。岩盤層は「丹波層群」と呼ばれ、約三億年前から二億年前にできたものである。やがてそれは度重なる地殻変動によって落ち窪んだ形になり、氷河期の間に海面の上昇と下降により陸地が海に覆われ、再び現れることを繰り返すなかで、雨や風化作用によって削られた岩石が砂や石となって堆積していった。基盤となる岩盤層は京都盆地のそれぞれ北側と南側に向けて浅くなり、一番深いところは旧巨椋池の下のあたりで800メートルのほどの深さになっている。雨や川が染み込んでできた地下水は北から南に流れていくが、宇治川、木津川、桂川の三川が合流する京都南部は基盤岩が急に浅くなっているために、京都盆地の地下に豊富な水が流れながら溜まった状態になっているのだ。その水量は琵琶湖に匹敵するほどの量と言われている。

見えないけれど足元に存在している世界。それをダエロンの絵筆を通じて描き出したら、どのような世界が現れるのだろうか。そのような期待を抱きながら、フランスにいるダエロンに企画の趣旨と一連の調査の結果を話すとすぐに賛同を得た。

脚注：井上勝弘、楠見晴重、山田邦和ほか『NHKスペシャル　アジア古都物語　京都―千年の水脈』日本放送出版協会 2002

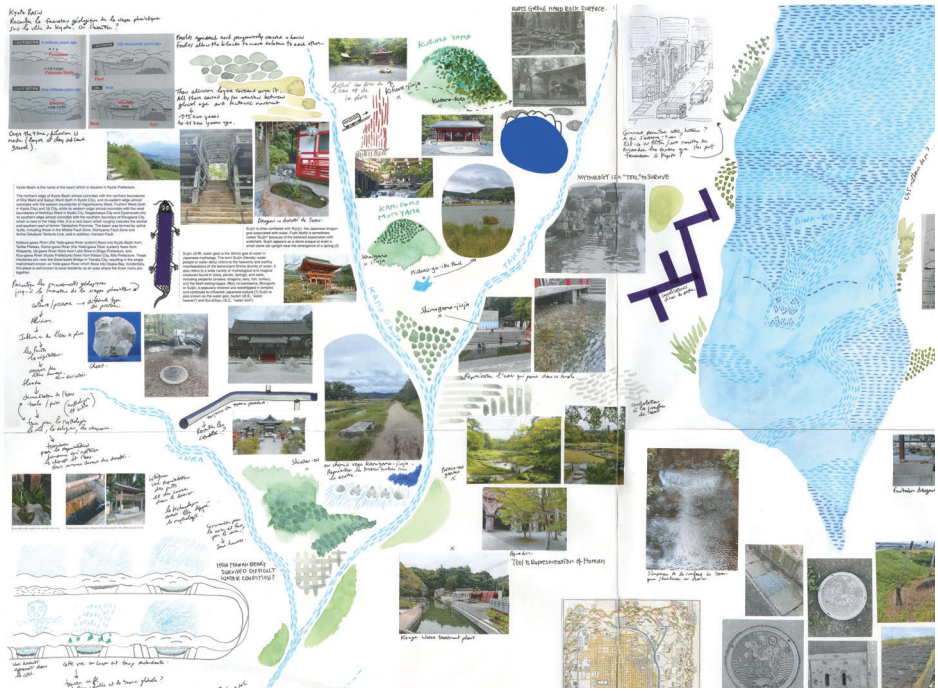


「Water Calling」原画制作中　作画：イザベル・ダエロン

専門家の知識をより遠くへ

同じ時、京都でも活躍する建築家の大西麻貴さんに奈良文化財研究所の主任研究員、惠谷浩子さんをご紹介いただいた。惠谷さんは日本全国で、その土地に住む人の生業と風土によって形成された「文化的景観」の調査を行っており、2019年には京都市からの依頼で京都の文化的景観の調査報告書も作成していた。私が京都水盆についての興味について話すと、惠谷さんは意図を汲んでくださり、実際に東山の水脈の跡を一緒に歩くことになった。まるで特別な案内人とともに旅に出たかのような体験だったが、「歩く」ということは、風景の研究をする惠谷さんにとって「話す」と同じくらい自然な行動なのだ。惠谷さんが用意してくれた地形図によると東山には東から西にかけて何本も谷があり、それに沿うように川が流れていたことがわかる。土地の起伏を感じながら歩くと、東に向かって緩やかに登りながらも所々、真ん中が落ち窪んだ道や水のながれていない橋が見受けられ、土地の表面から失われた多くの水の流れを再確認することになった。

京都に住んだ経験も浅く、水に関する専門的な知識がないなかで、このような研究者の方々とのやりとりは企画を進める上で心強かった。さらに惠谷さんから、多様な表現を通じて、ご自身の調査研究が広く一般に訴求できることにやりがいを感じると言っていただいたことも、何もないところからプロジェクトを立ち上げる上で心の支えになり、また私やダエロンが得意とする表現に注力することを後押ししてくれた。



「Water Calling」リサーチウォール、作画：イザベル・ダエロン

水の視点に立って考えてみる

2022年10月にはダエロンが来日し京都に滞在、そして私が惠谷さんのアドバイスを得ながら事前に調べた水にまつわる拠点を歩いて回り、今ある風景に残された水と人々の営みの変遷を辿るフィールドワークを行った。パンデミックの最中、観光客を受け入れる前の静かな京都は水の音に耳を澄ませるにはよいタイミングだった。

ダエロンがまず注目したのは、その土地に育つ植物などの植生である。それはかつて暮らしていた人々の営みを想像する手がかりでもあり、未来を指し示すものでもある。京都南部の宇治川、木津川、桂川の三川が合流する付近は昔から大雨によって抱えきれなくなった水を悠々と氾濫させ、その地形を保つための氾濫原であり、その付近に生えている葦やススキを使った茅葺き屋根は、水とともに生きる先人たちの知恵と工夫から生まれた技術なのだ。また、ダエロンは水の存在を指し示す表象のことも注意深く調べた。表象とは、例えば水場にある龍の絵や彫刻、その神社の誕生にまつわる神話、また神社仏閣に残る美術品などのことだ。特に龍はさまざまな場所で水を司る神として崇められ、その図像は至る所に見受けられる。今となっては美術品として丁重に管理されているものも、当時の人々にとっては信仰の対象を描き留めておくものであり、写真が発明される前の時代は記録だった。または、多く流れすぎて川が氾濫したり、少なすぎて干魃が起きたり、龍のように傍若無人に振る舞う水とともに生きているということを、人々が忘れないでおくための共有知と言ってもよいかもしれない。そのようにして「今ここ」にはないことを思い起こさせ、共通のヴィジョンやメッセージを念頭においておくための物語や表象は、災害に関する情報が瞬時に共有され辛い環境のなかで、人々の感覚や先を見る力を養い、身を守るために必要なものだったのだろう。

そもそも科学的なデータもなく、平等な教育もままならないなかで、昔の人はどのようにして地下水の存在を把握し、水と共存してきたのだろうか。さらに遡って、人間が地球上に現れる前、地球はどのように水を抱き、やがて人間はどのように大地の地下深くに流れる水の存在を意識してきたのだろうか。私たちは、このような問いに向き合いつつ、人間不在の過去から我々が生きる現在まで、水の視点で物語を組み立てドローイングとして描き出すことにした。

『Water Calling－京都の地下から聞こえる音』作と画：イザベル・ダエロン、作と文：永井佳子、デザイン：サイトヲヒデユキ、発行：書肆サイコロ、協力：惠谷浩子（奈良文化財研究所）

「Water Calling」（2023）展示風景、誠光社　Photo: Yosuke Otake

水を形にする

私たちが成果物として目指したのは本である。本は人の手で運ぶことができる小さな作品であり、書店を通じて流通させることで社会に流れ、ゆっくりと必要とする人の手に渡っていくことで、物語をできるだけ遠くに運んでいく。こうして本を作るにあたっては、信頼を寄せているグラフィックデザイナーのサイトヲヒデユキさんにデザインを依頼した。見えないところに流れる水の音に耳を傾けるべく『Water Calling—京都の地下から聞こえる音』と題した本書は、手に取った瞬間、水が物体となって手元にずっしりと重さを加えるかのように、水の気配に満ち溢れた一冊となった。

こうして、2023年3月に本が出版、それを記念して京都市内の書店、誠光社で展示を行った。本展のためにダエロン自らが描いた水面の壁画は圧巻で、書店の壁一面が水のゆらぎに覆われた。さらに展示期間中には本の内容を立体的に伝えるためのイベントも企画。建築家の大西麻貴さん、惠谷浩子さん、イザベル・ダエロンによる＜風景とデザイン＞と題したトークイベントでは、設計やデザインに携わる際、どのように風土や環境を調査し、そこに生きる人々と対話をしているのか、現場に携わる大西さんやダエロンの実例を交えて話し合った。その過程を通して、プロジェクトに関わる人々がその土地に根付いた文化が唯一無二であることを認識し、人々の地域への愛情が高まっていくことを、文化財の調査を通じて地域と関わる惠谷さんとともに確認することとなった。惠谷さんによる＜水を探して＞と題したウォーキングツアーでは、京都市内のみならず、東京からの来客や日本に滞在中の外国からの参加者とともに、江戸時代の東山の地図を見ながら、かつて流れていた川の痕跡を実際に辿った。そのようにして水の流れていない橋、道路の真ん中にある謎の窪みなど、水の存在をほのめかす地形を読み解き、土地の変遷を想像するための手がかりを共に学んだ。その後、6月には東京・高円寺にあるサイトヲヒデユキさんが主宰するギャラリー、書肆サイコロで、9月にはパリ郊外の文化施設

「水を探して」惠谷浩子さんによる京都東山ウォーキングツアーの様子（2023）Photo: Yosuke Otake

Fondation Fimincoにあるギャラリー、Laurel Parker Bookで展示を行ったが、いずれも京都の水というテーマから派生して、東京やパリなど観客が住む場所と関連した水の話題に及び、各地の人々の水について問題意識の高さを感じることとなった。

「風景とデザイン」トークイベントの様子（2023）Photo: Yosuke Otake

環境と感性

京都と水。京都に住む人にとっては馴染み深いテーマである。だが様々な背景を持った人々が行き来する場所だからこそ、何度立ち返って考えても新しい発見があり、人間が生きる根源となる素材だからこそ、幾度となくテーマにされてきたのではないだろうか。

ダエロンと私の共通した問題意識や美意識もさることながら、水というテーマを異なる文化的背景を持つ人間が共に考えることは豊かな発見をもたらした。この地球上に生きる生物にとって本質的なテーマを深めるだけではなく、それぞれの土地に住む人間が編み出してきた文化や技術を知ることにつながり、人間の営みの多様性を浮かび上がらせた。またフィールドワークや成果物を作るにあたって、アーティスティックな視点や感性に基づいた観点を大切にし、言語を介さない造作物に注目してきたことも強調したい。芸術には答えも正解もないからこそ、社会課題や環境問題に真剣に向き合い、解決に導くことは難しいとされがちである。しかしながら、自然は白黒はっきりできないことや、解明できないことに満ちている。昔の人々は与えられた環境で生きるために、感覚を最大限に研ぎ澄ませて、自然が人間にもたらすものの意味を身体全体で受け止め、読み解いてきたのではないだろうか。だからこそ芸術を通じて見えないものを描くことやストーリーを通じて語ることは、自然を捉えるために人間に与えられた、この地球で生きるための大切な能力のひとつなのではないだろうか。

水が呼んでいる。「Water Calling」は水から人間への呼びかけである。私たちは国境やそれぞれが属する文化に捉われることなく、水とともに生きてきた人間の知恵と技術を描き出すために、今も水の音に耳を澄ませている。大地から湧き出る水の音が決して消えることがないように。

永井佳子（キュレーター／プロデューサー）

慶應義塾大学文学部哲学科美学美術史専攻、ロンドン大学ゴールドスミス校キュレーティング修士修了。十五年に渡り企業にて文化事業、デザインディレクションを担当。2020年よりMateria Prima主宰。自然資源と人間の創造や生業がもたらす文化を軸にリサーチを行うほか、国内外の作り手と協働し、展覧会やエディトリアル、教材などの形を通じて、その考え方をよりよく遠くに届ける役割を担っている。学び続けるためのトークHamacho Liberal Arts（東京・浜町ラボ）企画、エルメス財団編『Savoir&Faire　土』（岩波書店）編集協力。